

Fresh Concert CMDJ 2013

～より豊かな音楽の未来をめざして～



開演前に撮影した全 22 名の演奏者に司会者と実行委員長が加わった集合写真



挨拶する
助川敏弥代表理事



①サクソフォーン四重奏



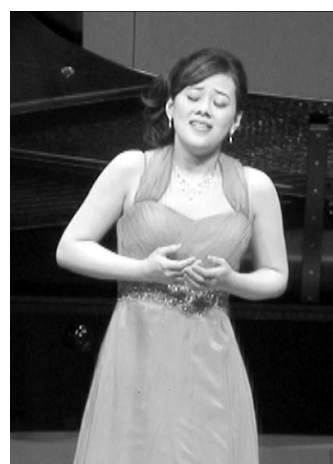
②保坂瑞枝(ソプラノ)



③吉田連(テノール)



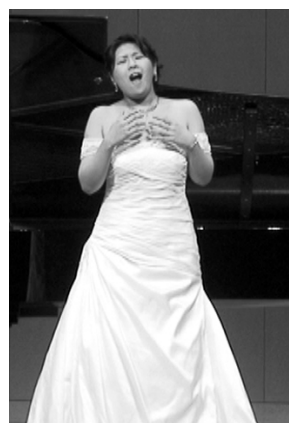
④小林萌里(ピアノ)



⑤種谷典子(ソプラノ)



⑥金管五重奏



⑦尾形志織(ソプラノ)



⑧宮崎芳弥(ピアノ)



⑨藤原唯(ソプラノ)



⑩芦田瑞樹(テノール)

《 伴奏者 》



森田真帆 ②



伊藤眞裕子 ③、⑩



松田怜 ⑤



高田絢子 ⑦



牧野優子 ⑨



西山淑子(司会)



当日飾られた花

音楽の世界

目 次

グラビア	Fresh Concert -CMDJ2013-		1
論壇	グレン・グールド考	中嶋 恒雄	4
特集	日本音楽の伝統とその継承		
	演奏家の立場から	佐藤 のり子	6
	古曲とは	竹内 道敬	12
書評	世界のダンス～世界舞踊祭 TOKYO から発信	高橋 通	17
リレー連載	未来の音楽人へ (5)	吉江 忠男	18
連載			
	音・雑記一ひなの里通信一 (58)	狭間 壮	22
	名曲喫茶の片隅から (39)	宮本 英世	24
	音 盤 奇 譚 (44)	板倉 重雄	26
	私とラジオ・ドラマ (11)	助川 敏弥	28
	電子楽器レポート・連載-6《東京カントライとハイドンの「戦時のミサ」》		
	室内ハイブリッドオーケストラの試み	阿方 俊	30
	福島日記(20)	小西 徹郎	32
コンサート報告	Fresh Concert -CMDJ2013-		34
会からのお知らせ	読者の皆様へ		39
	シューベルトの「未完成交響曲」を完成に導く為の予備的考察・I		
	奇跡としか思えない名曲	ロクリアン正岡	40
コンサート・プログラム			
	作曲部会 作品展 2013		46
	CMDJ 会と会員の情報		56

18世紀フランスの哲学者であり、百科全書の編集者であったD.デイドロは、「かつて賢人は、哲学者、詩人、音楽家であった。こうした才能は、分解しながら退化した」と述べたが、この言葉から私たち音楽をする者は、自分の活動を方向づける示唆を得ることができる。たとえば近年、医学などの分野でも、胃の前壁を専門にするなどのように分野は非常に細分化されているが、もう少し視野を広げて観察しなければ、治療がうまく行かないことが理解されている。そこで私たちの音楽においても、なるべく広い視野で実践することが賢人であるべき方法と、言っても良いであろうか。この賢人というものの事例や内容は、定義すれば異論続出となろうが、カナダの音楽学者ジェフリー・ペイザントは、ピアニスト、グレン・ゲールドをその一例として考えている。そこでここではゲールドのあり様を検討しながら、賢人としての音楽家の道を探ってみよう。

ゲールドについては、すでに多くが語られてきた。簡単におさらいをすれば、彼の生涯は次のようである。1932年にカナダのトロントで生まれ、1982年に50歳の若さで同地に没した。母親はピアノ教師であり、父親もアマチュアのヴァイオリン弾きという家庭の一人っ子として大事に育てられ、10歳でピアノ、オルガン、理論をトロントのコンセルヴァトワールで学んだ。10歳になるまでにバッハの平均律1巻をすべて弾けたというから、今日の水準に照らしても十分に早熟だったと云うべきだろう。11歳のときに地元トロントのコンクールで優勝したが、このコンクールには後年名をなしたコンセルヴァトワールの上級生たちも応募しており、その中で自信たっぷりの半ズボン姿の少年が優勝したのであった。しかし、これについて書かれた新聞記事には注目すべき内容がある。「大勢の若い子たちは、野心的な曲を弾いたが、ゲールド少年は、圧倒的な知性と責任感をもった控えめな演奏でひととき目立った」というのである。曲目は、モーツァルトであつたらしい。

1945年12歳でディプロマを得てコンセルヴァトワールを卒業し、19歳までピアノのレッスンを続けた。そして22歳の時にニューヨークで自前のデビューリサイタルを開催し、運良くディヌ・リパッティの他にもう一人のピアニストを探していたコロムビアのディレクターの耳にとまって、早速バッハの「ゴールドベルク変奏曲」が録音され、世界に知られるピアニストになった。しかしこの録音に始まる輝かしいコンサートピアニストとしてのキャリアを、10年後の32歳には自ら捨てて、録音や著作や放送の仕事のみで生涯を終えるように変更する。恐らくゲールドがステージに出演しなくなった理由は、ステージでは聴衆の反応を意識しない

わけにはいかず、無視するかおもねるか、或いは競争心に委ねるか、いずれにしても自分が自分本来ではあり難いということであつたろう。彼が自分本来のままでくつろいで演奏できる場所は、少数の理解のある技術者とともに、世間から隔絶された録音室であつた。グールドは演奏する目的を、自分と聴衆の双方の心に、エクスタシーを生み出すことと規定する。そしてこの演奏のためには、弾き直しや、モンタージュの可能な録音の方が、ライブよりもずっと満足のいくものを生み出すことが出来ると考えている。彼の言うエクスタシーとは、私の理解では、自分の心が音楽と一体になって、自分が音楽の流れに乗っている、或いは、自分の心に音楽が一杯に広がるという感覚のことである。音楽は決してアクロバットの名人芸や、派手なショウマンシップを発揮する場ではないことを、私たちはみな理解している。しかしそのような名人芸もまた、私たちの官能に訴えるのも事実である。グールドが賢者である所以は、私たちの官能を痺れさす最高の伎倆を持ちながら、それを名人芸に委ねず自己抑制し、音楽の持つ構造に新しい光を当てるためにのみ、彼の伎倆を捧げたことにあるだろう。彼の演奏の映像を見ると、より小さなりズム単位でフレーズを歌いながらの恍惚とした表情が、彼が音楽に完全に没入しているのを明らかにする。右手のみで弾くときには、空いた左手が思わず動き、指揮を取る。父親手製の折り畳み椅子に低く腰掛け、ピアノには台を足の下にかつて数センチも高くしている。姿勢は前屈みで、正統的な姿勢とは言い難い。彼自身もこの姿勢では、圧倒的なフォルテは得られないと認識していたようであるが、指の動きの速さや音への没入の得易さなどの利点があるとして、改めるつもりはなかったと思う。テンポはおおむねゆっくり目で、細部まで完全に明晰である。もちろん、速いものは明晰なままに猛烈に速い。

さて以上のようなグールドの生涯が私たちに与える教訓は、グールドがオルガンやハープシコードなど他の楽器を弾いたり、作曲や指揮、また講演や著作までもやったりしたように、出来る限り専門外の領域にまで関心を広げること、自分のありたいようにあれば、それで良いということ、周囲への意識は最小限にして、音楽の持つ感動の表現に努めることなどが、賢者への条件ということになるであろうか。しかし、グールドが良しとしたテクノロジーの進歩が、コンピューター歌手初音ミクを生み、それに聴衆が情念を昇華させている現在の状況を、グールドはどのように見るであろうか。彼が生存していたならば、案外再び、ステージに復帰したかも知れないと私には思えるのである。

(なかじま・つねお 本会 作曲会員)

～演奏家の立場から～

箏 佐薙のり子

はじめに

編集長から、突然の FAX で、実践経験を通しての立場から述べよ、との仰せである。私は、母であり師でもある、初世佐薙岡豊（さなぎ・おかとよ）の傍で、一挙手一投足の中に、教えられ育てられて来た。それ自体が、実践経験であると思う。だから、彼女の軌跡を辿りながらでなければ、この稿はとてもはじまらない。



お箏（こと）と私

私が、はじめて山田流箏曲（やまだりゅう・そうきょく）の手ほどきをうけたのは昭和 24 年、小学校 4 年生のクリスマスで、1 年後には、NHK は、ラジオだけの時代に終わりを告げようというとき、テレビ試験放送用のバスが動き回り、北海道放送（HBC）も、開局準備が大詰で、街中に明るい兆しが見えていた。

札幌における箏曲界では、八橋検校以来の古典曲と、生田流宮城道雄の新日本音楽が主流で、山田流の中能島欣一が、10 日ほど滞在しては、新感覚の自作品の講習に来ていて、母も、門弟を連れて講習会場へ日参していた。

「現代邦楽」という言葉も作品もない時代である。

はじめに申し上げた通り、私は、母を師匠と仰いだ日から、その生涯を閉じるまで、音楽生活の総てに深く係わってきた。その過程で、「継承」の意義にどのように繋がって行くべきか、なんて全く脳裏を過（よ）ぎることすらなかった。なぜなら、彼女は、二言目には「芸は一代、お母さんの後を継ごうなんて考えなくて良いよ！」と言っていたからである。

にもかかわらず、二代目を襲名することになってしまった。亡くなって考えた。「何故あの言葉を言い続けたのか?」「この子は、思慮浅く、跡継ぎはとても無理。お箏はちょっと弾けるけど。」と思っていたに違いない。思索、思考、決断、実践、洞察力といった点で、彼女は完璧であった。

大樹の陰で、幸せいっぱいにして、いまがあることは、自分が一番よく知っている。たとえ力量が問われたとしても、自分なりの存在理由をよくよく考えたし、周囲にも相談して、襲名を決断した。

佐薙岡豊の軌跡 1・・・プロへの道

佐薙家は、箏とは、縁もゆかりもない家系である。母、佐薙千代子（本名）は、明治42年生まれ。4歳の頃、北海道旭川で三浦栄州につき、小学校に入る頃には『六段』などをこなし、父の仕事の都合で室蘭へ移り、山田流萩岡派初世萩岡松韻（はぎおかしょういん〈現在は四代目〉）門弟の、播磨岡世に習い、小学6年生のときには、大体の曲をあげていた。この時期、師の勧めもあって、いずれ、東京でこの家元に学ぶことを夢に、子供ながらも、その目標の設定を大きな励みとした。さらに一家は樺太の豊原へ。庁立樺太高女に学びながら、乞われて、教える立場になるが、師には恵まれず、思い悩み、19歳の時上京。萩岡松韻の許、厳しい修行である。月ざらいではその場で弾く曲を決められ、たじろぐと、専門家のくせにと叱られ、プロ意識を叩きこまれた。

佐薙岡豊の軌跡2・・・尽きぬ好奇心

昭和3年に芸名「絲豊（いととよ）」を、昭和6年に昇格「岡豊」に改名、昭和8年、樺太から札幌に転居、開軒して「琴友会（きんゆうかい）」を創始する。

家元から、特に許されて、宮城道雄の許でも学び、直伝の宮城作品を、私たちに伝えた。『秋の韻』は、初めて手がけた大編成の曲。彼女はそれまでの和服姿を、パンプスとスーツ姿に替えて、札幌市公会堂のステージで指揮棒を振った。旺盛な好奇心に、誰もが黙って従った。

また、終戦直後のこと、NHK 企画の演奏会で、ドイツ留学から帰国したばかりの、ヴァイオリニスト荒谷正雄と『春の海』を演奏することになり、練習の過程で、荒谷の、音楽にかける情熱にただならぬものを感じ、西洋音楽に目覚めたと言う。音楽仲間の九島勝太郎からピアノを借りて、北海道庁立高等女学校の小泉正松にピアノを習い、シベリウスの『フィンランディア』に心を奪われてからは、レコードを聴きあさり、和声法、対位法を、池内友次郎著「和声法講義Ⅰ・Ⅱ」、「対位法講義Ⅰ・Ⅱ」等を教科書に、西田直道に学ぶ。

佐薙岡豊の軌跡3・・・作曲の初仕事

開局間もないHBCで、毎日の帯ドラマが企画され、岡豊は、はじめて作曲依頼を受ける。演奏は、母が箏を、助演の私は、十七絃を担当することに。

収録日には、学校帰りに、HBCスタジオに直行、徹夜になることもしばしば。楽しくも多忙な高校生時代を送った。そのあと紆余曲折あって、藝大受験を断念、家元二代目の時に、母の前名「絲豊」を許される。

佐薙岡豊の軌跡4・・・新たな挑戦

ドラマが終わる頃、民放祭参加で中能島欣一作曲『さらしによる合奏曲』を佐薙一門が初演。奨励賞を受賞し、HBCから感謝状を頂戴した。

引き続き、岡豊は、HBCの新妻博放送部長から、北海道在住の作曲家、松本雅夫作品の演奏を勧められる。



昭和56年6月26日 “群” 四回目ドイツ公演初日
左から3人目初世佐藤岡豊 (ミュンヘンにて)

松本は既に、全国邦楽コンクール作曲部門で『木と石の詩』によって文部大臣賞（昭和32年）を受けるという実績もっていて、HBCは民放祭参加の曲を委嘱する企画を進めていた。新妻はその演奏を、現代曲への挑戦として、彼女に勧めたのだ。

その作品は『蝦夷の春』3部作。第1章『摩周湖』、第2章『丹頂鶴』、第3章『ノサップ岬』からなり、男声合

唱、フルート、箏4パートの六重奏。

岡豊は、この曲と出会った感激を語っている「（前略）いろいろな音の重なり、美しい響き、あるときは不協和音、いままで弾いたことのない非常に現代的な音楽です。いままで求め続けて来た私の感覚に合った音、音、音。（中略）オーケストラに似た雄大さ、私は箏弾きとしてこんな生きがいのある演奏の出来ることに喜びを感じ、前途が明るくなった心持がしました・・・私は長い間、箏音楽の将来に対し、悩み、模索して来ました。それがこの松本氏の曲によって満たされ、長い時間をかけて勉強し、つちかってきた成果を得たよろこびに感無量でした。」（北海道発行「北海道開発功労賞 受賞に輝く人々」から引用）

松本作品による民放祭参加は、昭和37年まで続いた。

佐藤岡豊の軌跡5・・・札幌を飛び出して

その夏、岡豊の号令一下、東京新聞社主催「全国邦楽コンクール」に出場。松本の交響詩『春の水』（箏八重奏曲）を弾き、三曲部門第一位を獲得。

昭和38年には、第18回文部省芸術祭参加 松本雅夫作品による「佐藤岡豊箏曲演奏会」を開催。結果は、芸術祭奨励賞。東京公演のマネジメントは、日本コンサート協会に頼み、7年連続、昭和44年まで、芸術祭参加で開催して、打ち切りにした。

演奏内容は、古典と、宮城道雄、中能島欣一、松本雅夫、杵屋正邦作品を中心に、委嘱・初演作を必ず入れて、現代曲のレパートリーを増やすことをも、念頭に置いた。

客演に応じてくれたのは、青木静夫（現在 二代青木鈴慕）、伊藤松博（二世伊藤松超、現在は三代目）、高野和之、沢井忠夫、中島靖子、後藤すみ子、宮本幸

子、林リリ子、阿部靖、プロムジカ弦楽四重奏団（岩淵竜太郎、岡山潔、江戸純子、松下修也）等の方々。他にフルート、オーボエ、クラリネット、ヴァイオリンなどで複数人を要する時には、藝大の学生さんに協力をお願いした。

佐薙岡豊の軌跡 6・・・地元で地道に

岡豊はきっぱりと東京のステージに別れを告げ、昭和45年、札幌・新音楽集団“群”の結成に奔走。「新しい音を求めて」の構想の下、岡豊の趣旨に賛同して集まった、地元の洋楽邦楽の演奏家15名と日頃の理解者である学識経験者5名が同人で、10名の研究生、以上30名が創立メンバーである。

”群”の演奏会は、基本的に年1回とするが、定期ではない。ここでも演奏会の度に、委嘱による新作を発表し続けた。“群”のために新作を提供してくれた作曲家は、松本雅夫（2曲）、助川敏弥（4曲）、柳田孝義（5曲）、田中範康（2曲）、池辺晋一郎（2曲）、秋岸寛久、浦田健次郎、南聡、大塚夏生、川越守（6曲）、今藤政太郎、小島みつを（2曲）、大坂克之、木村雅信らの諸氏で、全氏が初演に立ち会ってくれている。

私の全国デビュー

コンクールや芸術祭参加で上京の機会に、私は、断念した藝大の、中能島教授から、個人レッスンを受けられるようになっていて、『三つの断章』『赤壁の賦』『新潮』『法隆寺』『箏・三絃のための組曲』『さらし幻想曲』などを、次々みて頂いた。もちろん、当時の家元三世萩岡松韻了承の許である。そしてNHK邦楽技能者育成会九期生になり、吉川英史、宮城衛（後に 小野衛）、藤井凡大、杵屋正邦の各師に師事。卒業の年に、NHK「今年のホープ」に選ばれ、三世山勢松韻作曲『都の春』をラジオ第二と教育テレビで放送。出演は、箏 宮下伸、三絃 佐薙のり子、尺八 横山勝也。宮下さんは、育成会の同期であって、横山さんは、この直後、『ノヴェンバーステップス』で大成功を収めた。

岡豊の信念

既に、ドップリと現代邦楽の世界に浸っていたが、決して、古曲の稽古は、手を緩めていない。「新しいものをやりたいなら、古典をしっかりやりなさい、基本的なだから」、生涯言い続けた言葉、信念だ。創始以来の琴友会温習会は年中行事になっているし、「佐薙岡豊この道70年」、「琴友会創始60周年記念」や、家元関連の第一生命ホール、歌舞伎座、新橋演舞場、国立劇場、三越劇場、NHKホールにおける演奏は、そのほとんどが古典の世界である。

私の箏リサイタル



昭和 49 年 10 月 1 日 リサイタルにて助川作品を演奏する筆者

”群”とのご縁から、お願いして、助川敏弥作曲『独奏十七絃による三章』を初演。以来、大切な、レパートリーの1曲として、国内・外で、もう何回演奏してきたことか。

また、一柳慧作曲『かたちなき無限の余波～箏独奏による～』は初演直後に、国際整形外科学会のレセプションで再演

し、イギリスの、バース大学マイケル・ティペットセンターホールで再々演の機会を得た。尺八の岩本由和とのジョイントコンサートである。彼は、イギリス南西部にある、ダーティントン藝術大学で、尺八を教えている。バース大学作曲科教授のマイク・ボーンは、『尺八と箏のための Darkening Horizons』を作曲、岩本・佐藤で演奏してほしいと言ってきた。尺八も大変そう、十三絃箏もまた、可能性の限界に挑みに挑み、酷使されたが、なぜか、遣り甲斐はあった。バースの同じホールで、世界初演を果たし、持ち帰ったテープを、母に聴いてもらおうと、「よくやったし、良い曲だ」と、珍しくほめた。しばらくして、マイクは、「速度の見直しをしたので」と、私の譜面に書き込むために、わざわざ来日して、我が家までやって来た。母の体調が、みるみる悪化していて、私は、それどころではなかった。彼は、とりあえず、書き込みをして帰って行った。再演は実現していない。

母を送って

佐藤岡豊が波乱万丈の人生を終えたのは、マイクが帰国して2ヵ月後の平成5年12月27日、享年84歳である。折々に、勲五等瑞宝章、札幌市藝術賞、北海道文化賞、北海道開発功労賞を受賞。そして、19回に及ぶ海外公演を成功に導き、”群”の演奏会は「第21回演奏会」を見届けて。

主役を失って、悲しんでいる暇は無い。年が明けて“群”は、「第22回」を追悼岡豊に、「第23回」も作曲家、松本雅夫・杵屋正邦両先生の追悼公演になった。2年続いた喪が明けたので、元気を取り戻したくて、10人程で、スペインで開催されたプレクトラム国際音楽祭に参加し、ついでにフランスに演奏旅行をした。演奏曲目に助川敏弥作曲『蒼風』があって、この度も、先生は同行してくれた。「第

24回」はその帰朝公演に。「第25回」は四半世紀のあいだに誕生した、30曲の委嘱作品から6曲を選び、『委嘱作品による』を、開催して、二十世紀、“群”の活動修了にこぎつけた。

今後は、委嘱作品の再演が、課題である。いまのところ「第26回」目開催の予定はない。

「絲豊」から 二代「岡豊」へ

一方、琴友会は岡豊三回忌追福と二代目襲名を兼ねて

「琴友会特別演奏会」を開催。七回忌と十三回忌も、「琴友会特別演奏会」と銘打った。

平成21年、十七回忌を目前に、私は、突然、不治の病に倒れ、一命はとりとめたが、左半身の機能を失った。情緒不安を、解消に向かわせてくれたのは、助川敏弥作曲『芳野川』と柳田孝義作曲『凜の風』の二作品である。辛うじて助かった右手のために、13（の解放絃）個の音だけの、調子替えもない。二つの作品は、平成24年4月の温習会で発表。両先生は、3年ぶりの復帰を祝福に駆けつけてくださった。



平成24年4月の温習会で演奏する筆者

あとを継ぐということ

ことし、琴友会は創始80周年を迎える。改めて「継承」の意味を考える。ここまで書きながら、つくづく思う「よくやってきた」と。ひたすら歩んできた60年に支えられて。

「母を信じ、辛抱強く、大胆且つ細やかに、いつも本気」を、くり返しつつ、上を目指してきた。ありがたいことに、この姿を見ている後輩たちがいる。新たな歴史を繋げて行ってくれることを信じて、90年目に向かいたい。

「創始80周年記念 2013 琴友会 温習会」は、新旧取り混ぜのプログラムで、会員挙げてのお祭りになる。平成25年10月26日 札幌市教育文化会館小ホールに於いて、開催の予定である。

(さなぎ・のりこ 箏演奏家／本会会員)

～古曲とは～

近世邦楽研究 竹内 道敬

名称と略史

現在ふつうに使われる「古曲」という言葉は、大正 8 年(1919)ごろ、町田博三(嘉章→佳声)が「古曲保存会」を始めて、当時あまり知られていなかった三味線音楽の研究をすすめ、録音レコードを頒布し、研究は『江戸時代音楽通解』(1920)として発表したのが最初である。さらに大正 14 年から始まった日本放送協会(NHK)で邦楽担当プロデューサーになったので、「古曲の時間」として河東節、一中節、宮蘭節(蘭八ともいう)、荻江節のほか、富本節、地歌の繁太夫ものなどを放送した。さらに昭和 8 年(1933)からは笹川臨風が「古曲鑑賞会」を組織し、定期的な演奏会を開催し、終戦近くまで続いた。



戦後になって笹川が引退したので、吉田幸三郎、篠原治らが「古曲鑑賞会」を引き継ぎ、昭和 37 年(1962)に財団法人古曲会を組織して活動を続け、今日に至っている。なお同会は 2012 年に一般財団法人として認可された。

種類

現在は上記のうちはじめの 4 種類の三味線音楽を指しているが、これらの音楽は単に古いという意味(宮蘭と荻江は比較的新しい)だけではなく、伝承者が一部共通しているという特色がある。各種を専門にする人のほかに、たとえば一人で河東節と荻江節を、宮蘭節と荻江節を習得しているという人もあって、一種の「古曲グループ」を作っている。最近でも 4 種すべてに一流と言われた人もあった。以下にそれぞれの略史と特色を記す。

[河東節]

初代十寸見河東(ますみ・かとう)が、享保 2 年(1717)に江戸で始めた浄瑠璃(語りもの音楽)で、直接にはその師である江戸半太夫(えど・はんだゆう)から独立したものの。江戸生れ江戸育ちの浄瑠璃で、それ以前の半太夫節、肥前節などを取り込んでいる。

始めは江戸歌舞伎の舞台に出演していたが、やがて常磐津(ときわづ)や富本(とみもと)に押されて、歌舞伎との縁は切れて、現在では歌舞伎十八番の「助六由縁江戸桜」に出演するだけになった。これは市川家からの依頼があって市川家の舞台に限定して出演するもので、今日までその伝統がまもられている。

三味線は細棹で、澄んだ鋭い音色をきかせる。さらに三味線演奏家が演奏の途中で、派手なかけ声(ハオーなど)をかけるのが特色である。また左手でのハジキもよく使われ、前述の「助六由縁江戸桜」(宝暦 11 年=1761 初演)では、それが多用され、印象が強い。

浄瑠璃(語り)は力強い発声で、とくに節尻の切り方が短いのが、ほかの三味線音楽ではみられない。

河東節は歌舞伎の舞台から離れて後は、同時代の富裕層(大商人、札差など)や文化人に愛好されたので、古い形があまり変化せずに今日まで伝えられている。江戸時代からの伝承曲は 42 曲。そのため長唄や山田流箏曲に大きな影響を与えている。たとえば長唄「吾妻八景」の初めは河東ガカリ(河東節風の雰囲気)であり、山田流等曲の「三番叟」は河東節そのままである。

[一中節]

初代都太夫一中(みやこだゆう・いっちゅう)が京都で始めたものだが、その起源ははっきりしない。初見は元禄 11 年(1698)である。やがて新興都市江戸に流入し、江戸歌舞伎の舞台に出演して人気を博したが、やがて河東節と同じく常磐津や富本に押されて劇場からは姿を消して、同じく江戸の富裕層の間で愛好されるようになり、上方では絶えた。そのため河東節と同じく、古い形が今日まで伝承されている。

重要なのは初代都一中の弟子に都半中(みやこ・はんちゅう)というのがいたことである。彼は後に宮古路豊後掾(みやこじ・ぶんごのじょう)となり、その豊後節は大流行したが、やがて幕府に禁止された。その結果彼の弟子たちがそれぞれ独立して、常磐津、富本、新内、宮蘭が生れ、富本からは清元が生れた。これらを「豊後系の浄瑠璃」といい、常磐津、富本、清元を「豊後三流」という。

三味線は中棹で、演奏には「粘って弾く」という口伝があるように、しんみりと余韻をきかせる。また「テツツンテン」というきまったパターンがあるのも特色である。

浄瑠璃には「ヒビキガナ」というのがもあるのも特色。これはたとえば「なにが」の「NANIGA」の「GA」の「A」を、「アーアーアンナーアー」のように伸ばすもので、アイウエオすべてで行なわれるが、使用する規則はないらしい。これは他の三味線音楽ではきかれない。

京都生れらしく優雅な風を残し、一見単調なようで変化に乏しいが、独特な雰囲気は他の三味線音楽に大きな影響を与えた。上品・素朴などの雰囲気をあらわすときによく使われている。たとえば長唄「勧進帳」で「判官御手を取り給い」のところは「一中ガカリ」である。また江戸時代末に流行した「端唄」に一中節の雰囲気を加えたのが「うた沢」であり、うた沢の稽古本には「すべて一中節を旨とすべし」とある。

江戸時代末に分派が始まり、天保10年(1839)に菅野派が、ついで嘉永2年(1849)には宇治派が生れ、もとの都派と三派があり、それ以前の曲のほか、各派独自の曲もある。各派共通曲は55曲、三派独自曲はそれぞれ20曲ほど。合計120曲ほどが伝承されている。

【宮蘭節】

宮蘭節の歴史はちょっと複雑である。現在は宮蘭節という名称で統一されているが、一時は蘭八節ともいわれた。それは宮蘭節の始祖は官蘭鸞鳳軒(みやその・らんぼうけん)であるが、その前の宮古路蘭八という人が実質的な始祖であり、二代目蘭八が宮蘭鸞鳳軒となったので、混乱した時代があった。

宮蘭鸞鳳軒は京都の人。官蘭節を名乗ったのはおよそ宝暦12年(1762)らしいが、彼は歌舞伎の劇場に出演したことがないので記録は乏しい。その弟子たちが上方の歌舞伎や人形浄瑠璃に出演して道行を語り、人気を得ていたが、やがて次第に衰微して、上方では絶えてしまった。それが江戸時代末に江戸に移されて、数少ない愛好家の間で伝承されてきた。その結果、江戸時代に作曲された曲は、わずかに10曲だけが残されている。しかしその中には「鳥辺山」という名作があり、また音楽史的にも重要な「桂川」と「夕霧」という曲も含まれている。そのほか戦後になっていくつかの新作もある。

三味線は中棹だが少し太い。バチはヒラキの部分が4ミリほどの厚さがある。義太夫のそれよりは薄い。そうしてバチ皮より少し上の部分を弾く。さらにコマの位置も胴の中心にわずかに近い。三味線の手は、同じパターンの繰り返しが多く、またクドキの前の合方(三味線の独奏部分)はほとんど共通している。これは宮蘭鸞鳳軒がまれに見る美声だったからだろうと推定されている。

やわらかで味のある三味線の音色は、永井荷風が「諸流の中でもっともしめやか」であり「夢の中で浮世絵美人に逢う」ようだと絶賛し、自身も熱心に稽古をしていた。

浄瑠璃は感情を抑えてしんみりと語り、聴く人の感性に訴えるように語る。

【荻江節】

荻江節はもっとも新しい上に、これは浄瑠璃ではなく唄である。始祖とされる初代荻江露友(おぎえ・ろゆう)はもと長唄の唄方で、彼が明和6年(1769)に歌舞伎の唄方をやめて吉原に入り、そこで長唄を好きに唄ったのが初めらしい。したがって短編の曲が多く、囃子を付けず、また上調子も付かない。

初代の没後、その弟子たち=男芸者が、吉原の廓の中で演奏した際に、劇場長唄とは違うので、長唄の芸姓を使わず、荻江の芸姓を名乗ったものらしい。したがって

江戸時代には「荻江の長唄」とか単に「荻江」と言われて、「荻江節」という記録はない。一時期はかなりの荻江姓の男芸者がいて、吉原俄というイベントでは盛ん

に活動したが、明治維新を境に絶えたと思われた。しかし伝承していた弟子たちがいて、明治中ごろに復興した。

ところがこれも演奏する人が少なく、演奏の場所もなかったので危機に瀕したとき、前に紹介した河東節の家元が、自分の弟子たちに習うようにすすめたので息を吹き返した。したがって現在でも、河東節の人には荻江を習う人が多い。

それは三味線が同じ細棹であり、同じ江戸生れの音楽というので、どこか共通点があるからであろう。さらには短い曲が多いという点も有利に働いていると思われる。江戸時代からの伝承曲は23曲。その後の新作もある。曲の種類は古い長唄曲が8曲、江戸時代の流行り唄が3曲、地歌から移したものが4曲、吉原俄でできた曲が4曲、その他となっ



CD『古曲の今』第二集解説書より

いる。

現状

なお現在重要無形文化財保持者(人間国宝)は、一中節2人、河東節2人、宮園節1人があり、またそれぞれの団体が総合指定されている。古曲会では、勉強会、演奏会を年1回開催するほか、それぞれを「知る会」を開催している。やさしい解説と演奏で、古曲の技芸向上と普及を目的にした演奏会である。なおそのライブ録音をCD化した『古曲の今』第一集、第二集を日本伝統文化振興財団から発売している。収録曲は、一中節18、河東節18、宮園節15、荻江節23で、宮園節と荻江節は古典曲をすべて収録している。

(たけうち・みちたか (財)古曲会理事、元国立音楽大学教授)

現行三味線音樂略系譜

上方歌
·
地歌

江戸長唄

荻江露友

大坂
竹本義太夫

都太夫一中

菅野序遊江戸

江戸
宇治紫文

上方―江戸
常磐津文字太夫

上方―江戸
富本豊前掾

江戸
清元延寿太夫

富士松薩摩掾

(中絶)

江戸
富士松魯中

上方―江戸―上方
宮古路豊後掾―

上方
宮古路園八

上方
宮
鸞
鳳
軒

上方一江戸
宮園千之

上方
豊美繁太夫

（地歌に取り入れられて伝承）

千寿

古浄瑠璃——江戸肥前掾——江戸半太夫——江戸太夫十寸見河東

「世界のダンス～世界舞踊祭 TOKYO から発信」

作曲：高橋 通

本書は、この10年間に世界舞踊祭で上演されたいろいろなダンスを中心に、古典舞踊から現代舞踊まで、舞踊教育にまで言及した内容が234ページに亘って写真付で解説されている。



世界舞踊祭は2003年から、会場を国立劇場と赤坂区民センターの2カ所に定めて、100カ国もの世界のダンスを上演して来た、いわば舞踊に於ける万国博覧会的な催しという。序文に拠れば「～細く長く楽しく、豪華版のディナーとしてではなく普通の食卓でも楽しい会話がはずむフェスティバル」運営されていたという。その世界舞踊祭（東京）に集まった人のアルバムであり、ダンスの解説書、研究書で、世界中のダンスに好奇心を持つ新しい観客のために作成されたもの。10年間の内容を収めるには、本書だけでは不十分なので、続巻が予定されている。

内容は、「古代遺跡と舞踊・音楽・スポーツ」「アフリカと中央ヨーロッパの民族舞踊」「ヨーロッパ宮廷舞踊の始まりから」「モ

ダンダンスのイサドラ・ダンカン研究」「コンテンポラリーダンスと現代舞踊の活性化」「世界各地のダンスと芸能」「日本の学校のダンス教育と民間のダンス教育」について、写真付で解説されている。夫々の項目の書き手は、学者や研究者ではなく、実際にダンスに携わっている人々であるので、実際的な観点から述べられていて、他書には見られない特徴が有る。惜しむらくは、音楽の方面からの記述が殆ど無いことであるが、不足分は続巻で補われることが期待される。

「世界のダンス～世界舞踊祭 TOKYO から発信」／編者：星 海舟 世界舞踊祭出版委員長
著者代表者：国枝たか子 2013年3月27日発行／定価（本体1,900円＋税）不昧堂出版

（たかはし・とおる 本会 作曲部会長）

心よ響け ～我が歓びの歌～

声楽：吉江 忠男

歌の旅 と “御柱祭” ～『木遣り』の魔術

十八年間に及ぶドイツでの音楽活動に終止符を打ち、我が故郷諏訪へ戻ろうと決心したのは、昭和天皇崩御一年前の昭和 63 年だから、早や 26 年の歳月が過ぎたことになる。声楽に対する熱い情熱を今まで支え、突き動かしてきたものは一体なんであったか。それを遡ってみると、10 歳の時の記憶に行き着く。

七年に一度の天下の大祭“御柱祭”の鮮烈な光景である。御柱街道に響き渡る、凜と張った『木遣り』の声。「山の神様お願いだ」と歌う肉声の、伸びやかで勇壮な響きは、幼い私の心を鷲掴みにした。その甲高い澄み切った『木遣り』一声で、氏子の力が結集し、巨木が一気に動き出すのである。人の声とゆうものが持つ、魂を奮い起こす程の凄まじさに衝撃を受けた。

諏訪大社上社、下社始め、各集落の神社、無名の祠に至るまで、あらゆる四隅に柱を立て、一年中が祭気分である。私も、見様見真似で人目も憚らず『木遣り歌』を歌っていた。いつの間にか、人並み外れた高音と大きな声が出せるようになったのはその甲斐だろうか。近隣の人々、小学校の先生や遊び友達の間で、大きな良い声だと評判になり、ささやかな優越感に浸っていた。しかしやがて祭が終わると、また元の、毎日暗くなるまで白球を追いかける野球少年に戻っていた。

音楽現代

2013 年 6 月号 定価 840 円

♪特集＝特集 栄光のベルリン・フィル

～今秋来日のビッグ・オーケストラの過去と現在

♪特別企画＝アニヴァーサリーな音楽家たち（2）

フランシス・プーランク、

ヴィトルド・ルトスワフスキ、パブロ・カザルス

♪カラー口絵

・びわ湖ホール&神奈川県民ホール オペラ「椿姫」

・フェスティバルホール・リニューアル

・ザルツブルグ復活祭音楽祭

・“オザワ復活!!”小澤征爾音楽塾オーケストラ・プロジェクト II

・ミューザ川崎シンフォニーホール・リニューアルオープン

♪インタビュー

シャーロット・デ・ロスチャイルド、児玉麻里、松原勝也、名倉淑子、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMY ビル 3F

芸術現代社 Tel3861-2159

暫く忘れかけていた歌への憧れは、中学二年の夏に突然現れた。フランツ・シューベルトの『菩提樹』という歌曲を、中学校体育館のグランドピアノのお披露目演奏会で聴いた。NHK放送局専属バリトン歌手の、深く温かい声を初めて耳にした瞬間、電撃が僕の全身を突き抜けた。「こんな声で歌える人になりたい。僕の求めている物がここに有る！」 声楽家になろうと決意した瞬間であった。人いきれの体育館の窓から流れてくる微かな風開け放たれた窓を吹き抜ける向こうの高ボッチ山のなだらかな稜線が、確に私に微笑みかけてくれた。



イエルク・デームス氏と共演
シューベルトの「水車小屋の乙女」を歌う筆者

高校生になり、偶然音楽室で見つけ夢中になって聴いたLPレコードの声の主は、後にフランクフルト・オペラハウスで共演する幸運に恵まれたハンス・ホッターであった。彼の声は、今まで聞いたこともないくらいまろやかだった。その、包み込まれるような柔らかな音色とビロードのような滑らかさは、「神の声」のように私には聞こえた。歌への想いはますます膨らみ、本格的に声楽を学びたいと考えるようになった。東京芸術大学声楽科への進学希望を宣言すると、周囲からは、「無謀なことを」、「分不相応だ」と、大いに失笑と反感を買った。しかし、断固たる決意は強く、どのような中傷にも耐え抜くことが出来、ついに昭和三十五年、念願叶い晴れて芸術大学

声楽科に入学が叶った。続けて大学院修士課程まで研鑽を積めたことは、幸運であった。

大学院終了の頃から、さらなる大きな欲求が頭をもたげ始めていた。もっと勉強したい、本場ドイツの音楽を浴びて、歌の神髄を極めたいという欲求である。しかし、ドイツ留学は経済的な問題から実現の可能性は皆無に等しかった。唯一残された道は、当時最も難関といわれていた「ドイツ大学学術交流会(DAAD)」の国家

試験で、奨学生として選抜されることであった。この一抹の望みに全身全霊を懸けた。ミューズ(音楽の神)は私をお見捨てにならなかった。

ようやく留学が許され、溢れる夢と期待を胸に憧れのドイツに足を踏み入れた。デットモルト音楽大学で五年間の音楽修行を経て、「フランクフルト歌劇場」専属バリトン歌手としての契約を果たした。全身が吸い取り紙であるかのように、音楽

Floria Tosca	Raina Kabaivanska a. G.
Mario Cavaradossi	Luciano Pavarotti a. G.
Baron Scarpia	Rudolf Constantin
Cesare Angelotti	Tadao Yoshie
Der Mesner	Georg Stern
Spoletta	Willy Müller
Sciarrone	Carlos Krause
Ein Schließer	Edwin Feldmann
Ein Hirt	Stephen Winter

1977年5月のフランクフルト歌劇場での「トスカ」の公演プログラムより。筆者(4行目)はアンジェロッティ役でカヴァラドッシ役のパヴァロッティ(2行目)と共演している。

に関するあらゆることを吸収する満ち足りた毎日だった。高校生の時に、神の声の如く耳に響いたハンス・ホッターとの舞台上での共演、三大テノールの[°]太陽の声[°] 故ルチアーノ・パヴァロッティとのオペラ『トスカ』での共演……一度は本場ドイツの舞台で歌つつみたいと夢見ていた楽劇『タンホイザー』のヴォルフラムを歌うチャンスを掴めたのもフランクフルト・オペラハウスであった。指揮者として今や、クラシック界のリーダーと讃えられるニコラウス・アーノンクールとのオペラ制作に携る共演の数々等々、



ザルツブルク ミラヴェル宮殿大理石の間でシューベルトの「冬の旅」をデムス氏と共演する

フランクフルト歌劇場での十三年間は、語り尽せない程、宝石の詰まったエキサイティングな日々の連続であった。

大自然に息づく “我が歌人生”

前述の通り “御柱” の原始的エネルギーと『木遣り』の魂の叫びが、私の歌人生のルーツである。この神聖な地の大自然の懷に抱かれて、生涯現役バリトン歌手で

いることが最大の願いであり、使命であると信じていた私は、ドイツ去るにあたり、故郷諏訪を最終活動拠点と決めていた。信州が、生活し、また音楽活動する上でも、最も優れたロケーションであると、誇りを持って言えた。それは、長いドイツ滞在を通じて確信となっていたし、ドイツ人が、自分たちの国に愛着を持ち、何よりも、故郷への熱い想いを大切にしているように、私もまた、生命と歌の心を育んでくれた私の故郷諏訪を賛美する気持でいっぱいになっていた。古希迎え七十二歳の現在も、歌の神髄を追求し、音楽の奥義を探し続ける日々は、宛ら宝探しのようなものである。



諏訪神社“御柱祭”での熱唱『木遣り象』

写真撮影：原勝昭氏

2008年ブラームスの「マゲローネのロマンス」でロマン派ピアノの巨匠、イエルク・デームスとの共演で互いに意気投合、それ以来毎年コンサートを重ね、ザルツブルク、東京、長野、福岡におけるシューベルト「水車小屋の乙女」、「冬の旅」の共演は話題を集めることが出来た。また、2012年日本発声学会コンサート「白鳥の歌」では”歌唱・テクニクは完成の域に達した”と絶賛され、センセーショナルな成功を収めることが出来た。

先月、四月には小林道夫氏の指揮の元、伊豆下田において当代髓一のソプラノ歌手幸田浩子さんとJ.S. バッハの『コーヒーカンタータ』を共演した。更に嬉しい事に、私の生徒、ソプラノとテノールの二人が揃って今年、東京芸術大学声楽科に合格し、長い歌人生のスタートラインに付けた事だ。真摯に、より豊かに、心を映し出す歌を、命の限り歌い続けていきたい。神々しいまでの諏訪の自然、その偉大な力に守られて歌える幸せをかみしめている毎日である。

(よしえ・ただお バリトン歌手 本会アドバイザー)

それぞれの富士



縁があって、地域の合唱団の忘年会に招かれた。その地区の小学校の音楽専科の女性教師も招かれて、僕は挨拶に立った。僕はありきたりで終えたが、その先生は挨拶にかえて歌います、と「あたまを雲の上にだし・・・」と始めたのだ。

今日、教えてきました。それは教科書準拠の折目正しい歌唱であった。「ふじは日本一の山」とその山容をたたえる「ふじの山」は、明治の唱歌。今でも教えているのだ。

ここでは富士山は日本一におさまっているが、第2次世界大戦期には、次の歌にさしかえられたとのことだ。作詞、作曲者不詳「富士の山」。2番を引く。— 今、日本にたずね来る／およその国人（くにびと）あおぐ山。いくまん年のちまでも／世界だい一、神の山。— というぐあいである。

比ぶものなし不二の山。大和民族の象徴としての霊峰富士は、「世界だい一」と讃美され、仰ぎ見られるのだ。その選民意識高揚の先には、敗戦が待っていた。



僕は世界のことは知らない。しかし、その意識は別として、眺めれば富士は昔も今も

美しい。

「富士の高嶺を西空はるか」と、母校小学校の校歌のフレーズを何度口にしたことか。その度に誇らしい気分になるのだった。晴れたら、朝な夕なに富士は身近にあった。近所のお風呂屋さんの湯船につかれば、眼前には色彩やかな富士山。三保松原を前景に冠雪の富士が、男湯と女湯の境にそびえたち、その裾を遠く引いているのだった。

何でもいいから、と言われたらいつでも富士山とチューリップを画用紙にうつした。その描法は、富士山なら正三角形の定木の先端を切り、3つのギザギザを作ればよし。チューリップは、先の細い三角形の底に刻みを2つ付け、天地を返せばそれなりだ。赤、白、黄色とならべて、後ろに富士山がある。小学1年生の図画の授業。へた！それでも△はもらえた。気がつけば、今、写真集や富士山関連のものが、手もとに集まっている。



このたび富士山が、世界文化遺産として登録されることになった。「世界だい一、神の山」などと肩いからさずとも、名実ともに世界の宝として大切に慕われるのだ。め

でたい。富士に触発されての文化は、古くから絵画、詩歌など多様な芸術として花開き、枚挙にいとまもない。自然景観

だけでなく文化遺産としての面目躍如
というところか。

女性教師の「ふじの山」を聞きながら、
男声合唱曲の「富士山」を思い出してい
た。多田武彦の曲。詩は草野心平。心平
は今、うまごやし（クローバー）の原っ
ぱの中だ。春の光を浴び、もの憂いけだ
るさに身をゆだねている。

少女たちがクローバーをつんで花輪
にしている。それを縄にして、縄とびを
始める。僕が心魅かれたのは、次のフレ
ーズ。

花環が円を描くと
その中に富士が入る
そのたびに富士は近づき
遠くに座る

縄とびの半円の中に、期せずして富士
山が！「フージーさん、オハインナサイ」
ということに。チャーミングだ。美しい
富士山だ。この発見、詩人心平はどんな
にかうれしかったことだろう。僕は歌い
ながら胸が熱くなった。多感な18歳の
ころ。



先ごろ母
の納骨を終
えた。富士の
麓の墓であ
る。享年94。
そこは父が
用意して一
足先に眠っ

ているのだ。

生前、父は富士登山を3度している。
遠く望むだけでは、と登った。元旦に山
頂にてご来光を迎えたこともある。気に入
っていた。それで富士の麓に眠りたい
と考えたのだ。

桜とサツキが咲き競う霊園の上に広
がる空に、大きな富士がある。そのふと
ころに抱かれて、母も永遠（とわ）の眠
りについた。



帰路、富士
の裾にそっ
て、広大な自
衛隊の演習
場が広がっ
ているのに
気づいた。ア

メリカの海兵隊も使う昔の日本軍の演
習場跡地だ。軍隊の演習場を擁する裾野。
文化遺産として、登録の障害にはならな
かったのだろうか。三保松原は45Kmと
いう距離を問題にされて、構成する資産
から省かれたのだが。

片目をつぶり通り過ぎれば、演習場な
ど気にはならないのか。余計な心配だっ
たか。「富士には、月見草がよく似合ふ」
太宰の「富嶽百景」を、ついでのように
思い出してしまった。道中、美しい富士
が見え隠れしていた。

予定外だったが、富士の見える宿をと
ることにした。夕映えの富士を肴に、父
母を偲び一献かたむけるのも悪くない、
と思ったからだ。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽
教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の
音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。
夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

【挿絵】武田 光弘（たけだ みつひろ）





名曲喫茶の片隅から

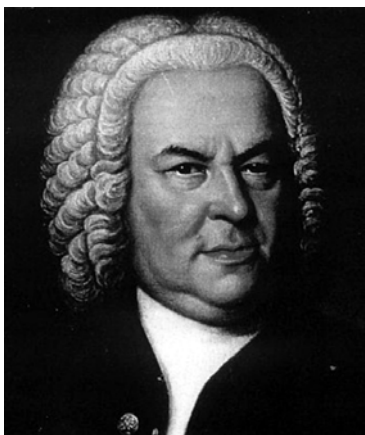
宮本 英世

〔第 39 回〕

インチキ医者にひっかかったバッハとヘンデル

偶然の事故や自殺によって死ぬというのは、多いとはいっても、全体から見ればあくまでも一部。大方の人の死は、病気によってである。その病気も脳系・心臓系・呼吸器系・消化器系といろいろあるけれど、どれかで死ぬと覚悟していて、そこに至るまでになお「これだけは、なりたくない」「なったら困る」と思われるのは、目が見えなくなること、視覚の喪失ではなかろうか。

音楽家の場合には、聴覚の喪失が一番かと思うけれど、視覚を失うことも、仕事上のダメージが大きい。何といっても楽譜が読めないし、書き込むことが出来ない。作曲するにしろ大変な努力と補助が必要となるが、じつはこの「視覚喪失」が原因で亡くなった作曲家。それも音楽史の分岐点ともいうべき重要な位置にいて——という人がいるので、ご紹介しよう。

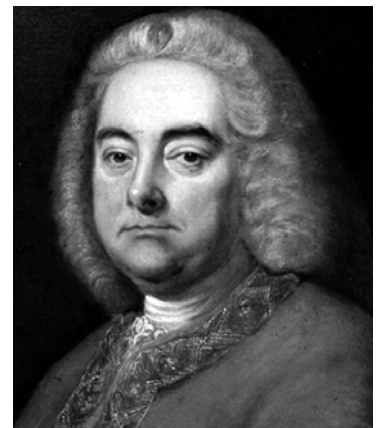


バッハ(1685-1750)

ほかでもない。バロック時代の2大巨匠、ヨハン・セバスチャン・バッハ(1685～1750、ドイツ)と、ゲ

オルグ・フリードリッヒ・ヘンデル(1685～1759、ドイツ→イギリス)である。

生没年を見てわかる通り、2人は同い年である(もう一人、ドメニコ・スカッラッティもいる)。それもドイツ人。ともに



ヘンデル(1685-1759)

バロック時代の後半を盛りあげ、その死をもって時代の終りを告げたほどの2人だが、バッハはドイツ国内を転々として器楽・教会音楽を極めたのに対して、ヘンデルはヨーロッパ中を旅して(後半はイギリスへ帰化して)オペラ、オラトリオに本領を発揮。オルガン曲の作曲と演奏が共通するぐらいという、対照的な活躍をした点で比較されることが多い。

ところが、である。共通点としてもう一つ。この方は不運となったのは、2人がその晩年にほとんど目が見えなくなり、最後に同じ目医者を頼って手術を受けたことである。バッハの目はもともと弱く、いとこのゴットフリートとエルンスト・バッハがやはり晩年に盲目になったことと合わせて家系的な遺伝によるものといわれるが、若い頃に兄の秘蔵す

る楽譜を月光の中でこっそり書き写したりしたことも視力低下に大いに影響したと見られている。ともあれ、ライプツィヒ時代（38才～死まで）の最後、すでに市当局が音楽責任者としての彼に見切りをつけ、後継者を決めている頃に、バッハはイギリスからやってきた眼科医「フォン・ティラー」に、最後の望みをかけて手術を依頼したのだった。

しかし、このティラーなる男、じつは全くのインチキ医者であった。「法王庁、皇帝、王侯公認の眼科医」とか「光学教授」などいろいろな肩書きを名のり、宮廷から宮廷を訪ねては公認の資格を貰い、移動には従者を従えていかにも名医の体裁を整える。そして手術は大勢の人を前にして公開でやる。残酷にして危険な手術の後には虫や蜘蛛を取り出して「こんなものが入っていた！」と手品じみたトリックさえも平気で使ったのである。まさに演出と宣伝だけで、人々を欺した天才サギ師。それでも困っていた患者たちは、彼を信用して押しかけたのであった。

バッハに対する手術は1750年3月28日と、4月の初めに2度行われたが、麻酔もなく針のような器具を眼に刺し込むという残酷な手術のあと、体を清めるという目的でとられた血液と、同じく毒素を吐き出すという名目で使われた下痢剤、吐剤によって、彼の身体はすっかり空にされた。視力は回復どころか完全

に失明。体力も失った彼は、それから3ヶ月後の7月28日、脳卒中の発作を起こして亡くなってしまったのであった。65才であった。

一方、ヘンデルの視力に異常が起きたのは1751年。最後のオラトリオ「イエフタ」を書いていた時（65才）からであった。まずは左目が見えなくなり、仕事を中断して休養したりしたが、一時的な回復のあとに再び悪化。両目へと移って、いよいよひどくなった。白内障である。温泉へ行ったり、何人かの専門医に見てもらったりするが、回復不可能と診断されて、遂に彼もフォン・ティラーに最後の望みを託した。そうなる背景には、14年ほど前に脳卒中を起こして左手が麻痺したことや、高血圧気味であったことなどもあるらしい。彼自身も氣力を無くして、遺書などを書いていた（1750年6月）というから、老人性のうつ病状態に陥っていたといえるだろう。

ティラーの手術は、バッハの時と同じであった。視界は闇に閉ざされ、体力も消耗したが、しかしヘンデルはすぐには死ななかった。それから8年も生きのび、1759年4月14日に、やはり脳卒中を起こして亡くなった。74才、独身であった。直前に遺書の訂正が行なわれ、「恵まれぬ音楽家に1000ポンドを寄付する」と付け加えられたという。

.....
【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



1913 年 5 月 29 日、パリ、シャンゼリゼ劇場でのロシア・バレエ団公演で、ストラヴィンスキー作曲のバレエ《春の祭典》が初演された。初演の際の大スキャンダルはあまりにも有名なので、ここでは繰り返さないが、古代ロシアの秘教儀式を題材としたこのバレエは、寒々とした極北を表した舞台装置、ニジンスキーによる難解な振付、そして何よりハーモニクスやコル・レーニョ、フルートのフラッター・タンギングなどの特殊奏法や変拍子の効果を散りばめた音楽が、あまりに従来のバレエと異なる刺激的な内容をもっていたので、当時の聴衆に衝撃を与えた。



初演の指揮をとったのはフランスの名指揮者ピエール・モントゥー（1875～1964）である。モントゥーは 1929 年、1945 年、1951 年、1956 年と 4 度、この作品をセッション録音している。最近、友人が 1929 年録音の SP レコードを入手したので、去る 5 月 19 日、初演 100 年を記念して共同主宰している阿佐ヶ谷ヴィオロンでの SP レコード・コンサートで再生した。

初演から僅か 16 年後の録音…。今日のオーケストラによる鮮烈な音色

と透き通る様な合奏をもち、流麗に進行する《春の祭典》と何と違っていることだろう！ オーケストラはいかにも音を出しにくそうに、合奏を揃えにくそうに、リズムをとりにくそうに演奏している。その音色は土臭く、絵画的であり、苦心惨憺している各楽器が寄り集まって頂点を迎えると、まさに秘教儀式のような野蛮な迫力が生まれるのである。私は《春の祭典》の原風景を見たような気がした。

また 1929 年は、マイクロフォン録音が開発されて僅か 5 年後にあたる。録音技術は未熟で、周波数レンジもダイナミック・レンジも制約があった。レコードは片面 4 分半しか録音できず、全曲収録に 4 枚 8 面を要している。

私と、ラジオ・ドラマ

連載第 11 回

作曲 助川 敏弥

一色次郎「秋扇愁魚」

本題のラジオ・ドラマから話がそれ続けた。本筋に戻す。

一色次郎さんの「青幻記」がご縁で、一色さんの作品にかかわることになった。

新作書き下ろしの物語、「愁扇秋魚」(しゅうせん・しゅうぎょ)である。この企画は、「青幻記」の制作者であったラジオ・ドラマ班の赤坂順之助さんの委嘱であったものであろうと推測している。物語の内容もいいし、私の音楽も自分でも会心に近いものを造ることが出来た思いのある仕事となった。

物語は「私」という作者自身の一人称の語りの型で書かれている。作家である「私」は、経済的に不遇な状態の中で新作に苦心してとりくんでいる。秋のある日、金魚を買いたくて琉金(りゅうきん)という種類の金魚を二尾買った。この魚を眺めるうちにその美しさに魅せられる時間が多くなった。やがて季節は秋から冬の訪れの頃となる。このままでは金魚は水が冷たくなり生き続けることができない。保温機の購入は「私」の経済環境からは不可能とわかる。「私」は、あきらめる。近くに凍らない池がある。石神井公園の三宝寺池を意味していることは容易に推察できる。ある日、金魚を鉢にに入れてたずさえた「私」は公園に向う。浮御堂から魚をそっと水に放つ。二匹の琉金は後になり先になり、水の中を沈んでいく。こういう物語であった。

語りは伊藤幸子さんであった。私は伊藤幸子さんとの組合せが多かった。伊藤さんに NHK との仕事が多かったのだろう。私の音楽の編成は、フルート・ソロ、ヴィオラが二人、ハープ、ヴィブラフォン、チェレスタであった。重要なフルート・ソロは野口龍君であった。

冒頭の部分、秋の長雨があがった日、果てから果てまで見渡せぬような広い青空がひろがる。その広大さに、「私」はふと畏れを抱く。水中の小魚が水の中から空を見上げた時、このような畏れを、抱き、感じるのだろうか、「私は、小魚の心をのぞいたような気がした」。冒頭の美しい記述である。

「私」は深夜まで仕事を続ける。金魚が妖しい魅力を放つのは夜である。二尾の琉金が後になり先になり、鉢の中を泳ぐ。時にすれちがう。作曲者として、この部分は音楽が最も触発された場面であった。この深夜の場面で、弱音器付きの二人のヴィオラが旋律を交差させる。それにハープとヴィブラフォンが最弱奏でふちどる。私は自分の音楽が他人の模倣である段階は過ぎていたが、説明のため描くならば、

ドビュッシーかラヴェルの音楽の美にやや似ていたともいえよう。やがで、深夜に金魚を眠らせないことはよくなかろうという夫人の忠告で、この深夜の鑑賞はやめになり、鉢には覆いをかけて金魚は休ませることにした。

一色さんによれば、「秋扇愁魚」の「秋扇」とは、昔の日本女性が、秋を迎え、夏の間使った扇子を丁重に収納する儀式的な行為だそうだ。ゆかしき時代の日本の女性生活の中の古典的なしきたりである。「愁魚」とは言葉の通り、美しさの中になにがしかの憂いを秘めた魚の意味である。一色さん本人が語っていたが、作者は、この文の中で、「美しい」という言葉を一度も使わなかった。安易な表現を避けた作家としての表現技術の告白を聞かされた。

不思議と符合することだが、金魚を主題とした文学に室生犀星の「密のあはれ」がある。この小説も私はラジオ・ドラマの音楽を担当した。平野愛子さんの制作であつた。こちらは、同じ主題と動機によりながら、美学的なとらえ方がまったく異なる。犀星の方はあくまで耽美的で、エロティシズムさえ内包する幻想の世界の展開であつた。

日本の私小説には自らのみじめさを自己露出するマゾヒズムの性格がある。貧乏くさく、みじめで、その貧乏くささと、みじめさを売り物にする。一色さんの文学にはそういう貧乏くささみじめさを売り物にするものが全くなかった。しかし、犀星の世界と並べるはめとなったその位置に置かれた私として、私には、やはり両者の違いに犀星文学のブルジョア的贅沢さを感じるのだった。

私にとって残念なことは、これらの音声の仕事の良質な録音記録が私個人の手元になくことである。手元に録音記録は所有しているが、当時、放送時に自宅で収録したものである。経年劣化もあるし、そもそもが自宅の民生受信機と録音器材の性能の限界もある。そして当時の記録方式がテープ記録の形であつたため、上等な音質はとてものぞめない。いまはCDに録音しなおして所有しているが、音質の不調はどうにもならない。本誌の「未来の音楽人」の記述の中でも、自分の小学生の時の工作作品の写真を保存していなかったことを書いた。私には保存についての認識と関心が不足しているか欠如しているのかもしれない。反省自戒する。最上質の保存を望めば放送後にNHKから原版テープを借りるのが一番いいのだが、仕事が多かったこの頃、一々テープの借り出しを請願していたら変り者と思われるであろうし先方も迷惑であつたろう。ためらわれることであつた。良質ではないが記録はある。聞いて頂きたいとも思う。楽譜は保存してある。これらの仕事は私にとって自主的な作品の一部である。

(すけがわ・としや 本会 代表理事)

東京カントライとハイドンの「戦時のミサ」 室内ハイブリッドオーケストラの試み

研究 阿方 俊

5月11日、指揮者、伊藤栄一氏の指導の下にあったいくつかの大学合唱団OBを母体として結成された東京カントライの第38回定期演奏会があり、ハイドンの「戦時のミサ（パウケン・ミサ）」を聴くチャンスに恵まれた。ハイドンは14曲ものミサ曲を世に出したが、このミサは1795年に作曲された大曲。これをエレクトーン×2、チェロ、ティンパニーの4人による「室内ハイブリッドオーケストラ」とでも呼べるカルテットが演奏し、そのオーケストラとは違うハイブリッドサウンドはコーラスの世界に新たな一石を投じた。これは何もコーラスの世界に限らず、オペラやピアノコンチェルトなどにも同様なことがいえよう。

ここで新たな一石を投じたといったのは、ミサやオラトリオなどのコンサートにおいて何らかの事情で通常の編成のフルオーケストラが使えない場合、対処策として弦楽器奏者を減らしたり、2管編成のものを1管編成にするなど、演奏者の数を少なくして演奏されるのが一般的であろう。しかしこのような場合、小人数になったが故の音の厚みや音量などでの物足りなさを感じさせられるのはやむを得ない。



室内ハイブリッドオーケストラとステージ：2列目左から第1エレクトーン、チェロ、テノールとバスの後ろに第2エレクトーン、ティンパニー

今回の室内ハイブリッドオーケストラは、電子楽器2名とアコースティック楽器2名によるカルテットであり、ステージ上の視覚的な量感は写真からもわかるようにオーケストラとはまったく異なるこじんまりしたものである。この異質の演奏スタイルからどのような音がしてくるのか少々心配しないでもなかったが、その心配は演奏が始まるや否や今まで聴いたことのないハイブリッドサウンドが空間をよぎり、即座に他では味わえない新しい音楽への期待感に変わっていった。これは電子オルガンだけによる電子音の響きと違い、弦楽器のチェロ一本が電子オルガンに加わることで、すなわち電子的で一律的な倍音にアコースティック楽器の一律でない倍音が加わったことにより自然倍音に近い響きが得られていたからである。

東京カントライが室内ハイブリッドオーケストラを用いるようになった先駆けとして、伊藤栄一氏が1989年の東京学芸大学混声合唱団定期演奏会でフォーレのレクイエムを3台のエレクトーン（佐野智美、山下美香、太田暁子）で指揮をしたこと

が挙げられる。ここでの楽器やエレクトーン奏者の紹介を筆者がしていた関係上、コンサート後に伊藤氏とレクイエムでバリトンソロを歌った東京室内歌劇場常任運営委員であった竹沢嘉明氏がエレクトーンアンサンブルに関して次のような印象を述べた。

「もし、私が数年早くこの楽器のよさを知っていたら、当時教鞭を取っていた東京芸大のオペラ実習の授業で用いたかった」（伊藤）。「東京室内歌劇場のモーツァルトサロンでやっているオペラハイライトなどでぜひ使ってみたい」（竹沢）。この後、東京カントライは定期演奏会でエレクトーンを活用するようになり、また東京室内歌劇場では、1990年に特別サマー室内オペラ公演のヴォルフ・フェラーリの「スザンナの秘密」とペルゴレージの「奥様女中」をエレクトーンデュエット（赤塚博美、柴田薫）と室内ハイブリッドオーケストラ（海津幸子、弦楽カルテット）の上演を皮切りに、その後いろいろな公演に発展する。東京カントライの定期演奏会における電子オルガンを用いた曲と演奏形態をみると以下のようなになる。

年代	作曲家／作品	エレクトーン奏者／共演者
1991	モーツァルト「戴冠式ミサ」	伊藤佳苗／アンサンブル・フレイア
1996	ブラームス「ドイツレクイエム」	伊藤佳苗、近藤岳、塚瀬万起子
1998	プーランク「グローリア」	伊藤佳苗、塚瀬万起子
2000	プッチーニ「グローリア・ミサ」	伊藤佳苗、塚瀬万起子
2002	フォーレ「レクイエム」	伊藤佳苗、橘光一／harp: 井田美幸弦楽アンサンブル
2003	プーランク「夜課の7つの応唱」	伊藤佳苗、塚瀬万起子
2004	J. ラター「レクイエム」	伊藤佳苗／vc: 高木慶太 ob: 工藤亜紀子 fl: 池邊昇平
2005	シューベルト「ミサホ長調」	伊藤佳苗、伊倉由紀子／timp: 服部恵
2007	J. ラター「マニフィカト」	伊藤佳苗、桑原哲章
2010	M. デュルフレ「レクイエム」	伊藤佳苗、杉田香織
2011	S. ドブロゴス「ミサ」	伊藤佳苗／pf: 北矢由美
2013	ハイドン「戦時のミサ」	伊藤佳苗、千葉祐佳／vc. 毛利伯郎 timp. 服部恵

* リストは東京カントライ會田和夫事務局長提供資料から抜粋



左から筆者、千葉祐佳、伊藤栄一、伊藤佳苗

ここでの作品の特徴を鑑みて、エレクトーンアンサンブルのあり方をいろいろな形で追求しているようにみえる。

38回目の定期演奏会を迎えた今年、伊藤氏は88才になるとのこと。今後、合唱界のみならず電子オルガン音楽の発展のためにも、まずは39、40回目の定演で新たなチャレンジを聴きたいと願うのは満席だった聴衆全員の思いではなかろうか。

（あがた・しゅん 本会研究会員）

「デッサン、そして書から見つけたもの」



今学生に限らず音楽家の中でとても不足しているもの、それは「デッサン力」である。デッサンは絵画の基本である。何故音楽家に「デッサン力」が必要なのか？そこを紐解いてみようと思う。ドレミって？ドミソって？音楽は人工のものである。音楽に限らず芸術は人工のもの。

だが、できることならガチガチの人工物ではなくて自然にすっと入ってくる、そういうものでありたい。人間は自然と共存していることを認識できていないことが多々ある。人間は自然の一部であるということも忘れているかもしれない。だからこそ自然との共存を音楽や芸術を通じて表現、創作していくことが大切である。つまりドレミやドミソを考える前に考えることのほうが多いはずなのだ。形骸化した言語或いは言葉は重要ではない、だが言葉は最も重要で必要なものだ。必死になって言語、言葉を生み出していくことは美しいと感じる。音楽に音は重要ではない、だが音楽に音は最も重要なのだ。ドレミ、ドミソから始まってしまう音楽、ドレミ、ドミソは抽象である。長調は明るい、短調は暗い、これは刷り込まれた法則である。そういう環境の中で音楽を考えていて本当に創作できているといえるのだろうか？と私は疑問に思った。

私は美術鑑賞が趣味なのでいろいろと興味深く美術の世界を覗いている。そこで多くの美術家と語り合う中で音楽表現の最も重要なヒントが「デッサン」にあると感じた。デッサンは見た目だけをなぞらない。衣服を着た人物を描くときに人物の骨格や筋肉から始まり、皮膚、そして皮膚の質感、産毛、あらゆるそこにあるものを描き表していく。そして人の内面や人が積み上げてきた時間を浮き彫りにしていく。このように観察する眼を養い、表現するのがデッサンだ。これを音楽で喩えるならばドレミ、ドミソだけではないその周りにあるものすべてを描かなければならないはずだが、そこに至らずに学びを終えてしまっている者がとても多いと感じる。音楽を演奏するのなら骨から演奏し、内臓を響かせ、皮膚を奏で、毛穴や産毛を音の手触りとし、筋肉を歌って表情を音楽とすべきだ。この感覚を育てるためには実際にデッサンをし、そこから体感できたことを自身の創作や演奏に反映させていくことが大切だ。だから音楽を学ぶ者はぜひデッサンも学んでほしい、そこから更に多くある音楽のエLEMENTをデッサンから発見してほしいと願う。





書道 華の会 代表 鳳月 作品

先月、「書道 華の会」の代表の鳳月（おうげつ）さんのお誘いをいただき、武蔵野市民芸術文化協会、武蔵野市教育委員会共催、主管「書道 華の会」の書道展に伺った。JR三鷹駅北口にある武蔵野芸能劇場2Fの小ホールの入口には和服姿の関係者の方々が丁寧に迎えてくださり、とても品のある展示であった。この展示では「遊書の会（代表 大庭 秋雪）」と「書道 華の会（代表 鳳月）」にて書を学んでいる子供から大人までの

書、そして代表の書など多くの作品があり、私は書はわからないが、いろんなことを思い浮かべながら長い時間鑑賞させていただいた。子供の書をみていて書いている姿や姿勢が見えてきたり、ああ書き馴れていない文字なんだなあ名前を書くところで一気に緊張がほどけたんだなあ、ああこの子はきっとやんちゃなんだなあ、この子は几帳面なタイプなんだろうなあ、と、書いた人の性格や様子が思い浮かべることができて楽しかった。大人の方の書もとても楽しく鑑賞させていただいた。学んで間もない文字なのかな？とか、まったく迷いのない書など素晴らしい作品が多く展示されていた。書の重みは時間の積み上げである、だが時間の積み上げは書に重さをもたらさないのだ、など思いながら楽しんだ。「飛」という文字、この文字はゲシュタルト崩壊の例で出てくるが、書になると不思議な現象がおきる。「飛ぶ」という文字は上昇のイメージがある。だが助走は上から下へ、そして上にはねる。つまり飛ぶという文字は書になるとホップ！ステップ！ジャンプ！その軌跡、つまり人の道を描いているように感じたのだ。そして文字とは人の未来を示唆はしても提示しないものなのだと。なぜなら人の未来は人にゆだねられている、ということを書は人に伝えたいからなのだとそのように感じた。

書はその人の多くを表す、それはデッサンにおいてもいえるだろう。そして書やデッサンのように音楽ももっと身体や色彩や温度や手触り、また見えないところにまで音楽を視覚として意識していき気持ちを描くように創作され演奏されるべきだと私は強く思う。もっと豊かにもっと細かく観察してデッサンや書が常に線を探し続けるように、音楽も常に音を探し求める旅をしてほしい、そういう視点を音楽家にも身につけてもらいたい、そのように願う。武蔵野市民芸術文化協会、武蔵野市教育委員会、書道 華の会 代表の鳳月さんにはこのような素敵な発見の機会をいただき心より感謝している。

（こにし・てつろう 本会理事）

挿絵 前川久美子（まえかわ・くみこ 山口芸術短期大学在学中）

写真提供 書道 華の会 （代表 鳳月）

～より豊かな音楽の未来をめざして～

『Fresh Concert』は、昨年節目となる第10目を開催し、今回は次の10年に向けての新たなスタートをきるコンサートとなります。

今年は、出演者の出身校が例年以上に特定の音楽大学に偏ってしまいましたが、木管と金管のアンサンブルが入ったため、出演者は17名と過去最大の人数にのぼり、伴奏者を合わせると22名の若い音楽家がステージを踏みしました。

来場者については、昨年の実績を50名上回り、170名ほどの方々がこのコンサートを聴きに訪れました。来場者の人数はこのコンサートとしては平均的な数字ですが、例年になく、本会関係者の来場が少ないのが気になりました。このコンサートは本会の代表的企画として定着しつつあり、一般聴衆の数も増加傾向にありますが、会員にとっては毎年のことなので慣れすぎて、少し反応が冷ややかになって来ているのようにも感じ、気がかりではあります。

演奏者の力量については、多少のバラツキがありましたが、すべての出演者が今現在の持てる力を精一杯発揮し、熱演を繰り広げたため、その音楽的熱意がお客様にも伝わったようです。そういうこともあってか、今年はアンケートの回答が29通集まりました。回答の中には音楽通の人が書いたと思われる演奏者にとって参考になる有意義なものも少なからずありました。

コンサート自体は、かなりの成功だったと自己評価してもよいと思いますが、終演後に錦糸町駅近くのレストラン『土間土間』で行われた打ち上げには、出演者が一人しか参加せず、他の参加者は会員だけで寂しい会となりました。結果について出演者を責めるより、実行委員一人体制でこのコンサートを運営したことで、出演者に対して、打ち上げ参加への勧誘、誘導などを行う余裕がなかったという事情があったと思います。この企画を継続し、発展させて行くためにも、より若い会員の方に実行委員として加わっていただき、来年以降は実行委員二人体制で挑むようにしたいと考えております。

以下に、各演奏について実行委員長である私の寸評を記載します。私個人の感想ですので、気楽にお読みいただきたいと存じます。

なお、演奏写真は、グラビアページに掲載されておりますので、そちらも併せてご覧ください。

- ① 内田 しおり(Sop.Sax.)／中村 有里(Alt.Sax.)／小田采奈(Ten.Sax.)
丹沢誠二(Bar.Sax.) 〈サクソフォーン4重奏〉
マスランカ 「レシテーション・ブック」より第1、第5楽章

冒頭のソプラノ・サクスのソロから始まるコラール風の楽想では、ソプラノ・サクスが張り切りすぎたためか、弱奏で演奏する他のパートとのバランスがとれ

ていませんでした。時間を追うにつれてアンサンブルの呼吸があって行きました。難度の高い演奏技術が駆使されている第5楽章では、興が乗ってきて、賑やかで華やかなこの楽章を、若さ溢れる演奏で盛り上げてくれました。ゲネプロでは各自の都合で全員揃うことが出来ず、僅かな予備時間を借りて練習するという、かなり危ふい準備状況でしたが、日頃一緒に演奏している仲間同志ということもあって、本番での大きな破綻はありませんでした。卒業後、仲間が揃ってアンサンブルを続けて行くことは、社会的、経済的にとても難しいことと思いますが、せっかく形成した四重奏団ですから、これからもこのメンバーで演奏を続けていただきたいと思います。

② 保坂 瑞枝(ソプラノ) ピアノ：森田 真帆
フォーレ “月の光” Op. 46-2 / “マンドリン” Op. 58 / “ひそやかに”

最初に演奏した“月の光”は、ピアノが主旋律を受け持つという珍しい書き方がされていますが、歌がピアノに圧倒されてピアノに主役の座を譲り、脇役に甘んじていたように感じました。2曲目以降は、次第に過度の緊張から解放され、表現も伸びやかになって行きました。ところどころ瑞々しい魅力を感じさせるところがありましたが、発声、表現ともまだ若く、今後の成長を期待したいと思います。音大を卒業した後は、音楽教室でピアノを教えるそうですが、歌は続けて欲しいと思います。司会者の言葉にもありましたが、歌は音楽の基本ですから、音楽を続ける限り、歌に対する愛情を持ち続けて欲しいと願います。

③ 吉田 連 (テノール) ピアノ：伊藤 眞祐子
ガスタルドン “禁じられた音楽”
ドニゼッティ 歌劇『愛の妙薬』より “なんとかわいい人だ”

この人は、まだ荒削りですが、声の質も歌唱表現も魅力的で、将来大きく伸びる可能性を感じました。初めに演奏したガスタルドンの“禁じられた音楽”においても、甘く美しいテノールの歌声で聴衆を魅了しましたし、『愛の妙薬』の“なんとかわいい人だ”は、木訥で純情な青年の愛の想いが、伝わってくる演奏だったと思います。まだ、発声、歌唱表現においてかなり未完成の要素を残していますが、それだけに、これからの成長が楽しみです。特に高い声は時には甘く、時には力強く歌い、聴き手魅了する力を持っているとは思いましたが、この日の最高音である二点イ音のフェルマータでは、力みすぎて余裕がなかったように感じられました。

練習を積み、多くの舞台を経験することで、この人の歌い手としての魅力は磨かれて行くことでしょう。

④ 小林 萌里 (ピアノ)
リスト メフィストワルツ 「村の居酒屋での踊り」 S. 514

なによりも、若い人に見られがちな勉強会風の演奏ではなく、この作品の音楽的
魅力が聴き手に伝わる演奏をしてくれたことがとても良かったと思います。若々し
さを失わず、色々な音楽に果敢に挑戦し、さらに成長して行って欲しいと願います。

まだ、まだ課題は沢山あるでしょうが、オペラ歌手を目指しながらも、歌曲を含めた幅広いレパートリーに挑戦して行こうという姿勢には好感が持てます。今後の活躍を大いに期待します。

現代曲といっても、愉快で親しみやすい曲で、メンバーの呼吸がよく合っており安心して聴くことが出来ました。かなり高度な演奏技術を必要とする作品ですが、よくバランスのとれた演奏だったと思います。さらなる要求をすると、強奏と弱奏のコントラストなど、もっと音楽的な変化が出せると、より興味深い音楽になったと思います。それには、経験の積み重ねの上に築かれた、自信と精神的なゆとりが必要でしょう。これからも頑張っこのメンバーで演奏を続けて欲しいと思います。

⑦ 尾形 志織 (ソプラノ)

ピアノ：高田 絢子

ドニゼッティ 歌劇『ランメルモールのルチア』より 狂乱の場

このアリアは高度なコロラトゥーラの技術とドラマチックな表現力が要求される難曲ですが、演奏を通してまず感じたのは、彼女のルチア役への理解と愛情の深さです。悲惨な現実から至福な愛の想いへと激しく移り変わって行くルチアの心に迫ろうとする演奏者の心情が、歌のみならず、しぐさや顔の表情からもひしひしと伝わって来ました。最初のハ短調の弱奏から、リリック・ソプラノの柔らかく艶やかな声が聴けましたが、コロラトゥーラの部分に入っても声の艶やかさは維持されました。ただ、高い音域で音程が上がりきらないと感じた個所がありましたが、最後の最高音、三点変ホ音は綺麗に発声されていました。彼女が歌った部分の後に、男声役、合唱などと絡みながらアリアは続きますが、この部分を省いたのは正解だったと思います。この部分は男声、合唱との絡みがあってこそ、ドラマチックな表現が生み出されるからです。このオペラの全曲を演じ切るにはさらなる研鑽が必要でしょうが、いつの日か、彼女がオペラの舞台に立って、この役を演じ切る姿に接したいものと思います。

⑧ 宮崎 芳弥 (ピアノ)

ショパン

バラード第3番 変イ長調 作品47

この作品に対する演奏者の強い思い入れは、ミツケヴィチの詩とこの作品との関係に触れた本誌4月号掲載の彼女のメッセージからも伝わって来ます。この日の演奏からは十分な練習の蓄積をうかがわせる端正な音楽が聴けました。また楽曲構造もしっかり捉えており、最後のクライマックスでの盛り上がりは、なかなか見事でした。しかし、過度の緊張感もあってか、音楽のつくり方に余裕がなく、彼女が目指していたこの作品に内在する詩情を表現するまでには、至らなかったようです。詩情と言っても音で表現する訳ですから、テンポの揺れ、強弱、音色の微妙な変化などに気を配りながら、その連なりの中に音楽的魂を注ぎ込んで行くことが求められます。この人からは音楽に対する真摯な姿勢が感じられますから、さらに研鑽を積み重ね、色々な音楽に接し、多くの演奏の場を持つことで、より自由で説得力のある音楽表現を獲得して行けるのではないかと考えます。

⑨ 藤原 唯 (ソプラノ)

ピアノ：牧野 優子

ドニゼッティ 歌劇『アンナ・ボレーナ』より

“あなたがた泣いているの？～私の生まれたあのお城”

王妃アンナがロンドン塔で処刑される前に歌うこのアリアは、明暗の表情の変化の幅が大きいアリアでドラマチックな表現力が要求されますが、歌い始めた時から、透明感のある美しい声と、可愛らしい表情に魅了されました。音程も発声もよく訓練されており破綻がありませんでしたが、激しく悲劇的な表現が要求される部分で

は、やや迫力が不足していたように感じられました。しかし、こういう不満は、さらなる声楽的成熟と、舞台経験を積み重ねる中で、徐々に解消されて行くものと思います。今回の彼女からは王妃様というより、未婚の可憐な王女様という印象を受けましたが、聴き手を魅了する素性の良い声と、オペラ向きの容姿を持ち合わせており、将来の成長がとても楽しみです。

⑩ 芦田 瑞樹 (テノール) ピアノ：伊藤 眞祐子
山田耕筰 〈城ヶ島の雨〉
チレア 歌劇『アルルの女』より 〈フェデリーコの嘆き〉

一曲目は珍しい山田耕筰の歌曲〈城ヶ島の雨〉を歌いましたが、繊細な表情の変化などを、なかなか良く表出しており、若いながら高い演奏解釈力を備えていることをうかがわせましたが、弱声の際、しばしば声がピアノ伴奏に隠されてしまうところがありました。二曲目のオペラのアリア〈フェデリーコの嘆き〉では、声の美しさと叙情性豊かな歌唱表現については魅力を感じましたが、この曲を歌い切るには、もっと響き渡る声量が必要です。この人は、発声面では、まだ成長の途上にあり、オペラの分野に進むのが好ましいか、歌曲を中心に活動して行くのが好ましいか、これから答えが出て来るような気がします。私の知人で大学院時代はあまり大きくはないが甘く美しい声を持っていた人が、大学院修了後しばらくして、輝かしく力強い声が出せるようになり、オペラ歌手として大成したという例を知っています。自分が目指す方向を模索しながら、精進を重ねてもらいたいと思います。

演奏評の終わりに、5人の声楽伴奏者が、いずれも丁寧なピアノ伴奏で、歌い手たちを支えていたことに触れておきたいと思います。

また今回特によかったことは、例年よく見られる、自分のお目当ての人が演奏し終わると、途中で席を立つような聴衆が、殆どいなかったことです。多くのお客さんが最初から最後まで熱心に聴き入っていました。もちろん、それだけ出演者が熱演を繰り広げてくれたということでしょうが、事前に「途中で席を立たないようお願いします」と丁寧にアナウンスしてくれた、11年間このコンサートの司会を担当している西山淑子さんの手際の良さも貢献していたと思います。また、この企画を長く続けて来られたのは、多くの方々の協力があったのことと思います。

我が国の音楽文化の発展のため、若い音楽家を発掘し育成して行くこのコンサートは、これからも続けて行きたいと思いますので、これからも協力をお願いします。

行く行くは、このコンサートをスタート台にして楽壇に巣立って行った人達を集め、Fresh Concert のOBによるコンサートなども企画したいと考えております。

(コンサート実行委員長 中島洋一)



読者の皆様へ

いつも本誌のご購読をありがとうございます。私たちは音楽家、舞踊家、芸術愛好家のために手作りで雑誌発行に励んでおります。読者の皆様へ、お願いとお知らせがありますので、お読みいただきたく存じます。

○お願い

1 読者をご紹介ください。

今本誌では一人でも多くの読者を求めています。ご紹介ください。

年間定期購読者ご紹介の方にはご購読の号を3号延長してお送り致します。

2 本誌の取扱店＝本屋さんをご紹介ください。

詳細の打ち合わせは当方で致します。こちらも前項同様のお礼を致します。

月刊「音楽の世界」出版部

○お知らせ：日本音楽舞踊会議へのお誘い

◆会員へのお誘い

本会是一个の専門だけではなく、声乐、器乐、作曲、研究、评论、教育、轻音乐、舞踊、などさまざまなジャンルの専門家で構成される団体です。機関誌として、この「音楽の世界」を発行し、演奏会、ゼミナール、研究会などを開催するほか、会報、メールマガジン、ホームページの発行や、会員同士の交流、情報交換などもあり、さまざまなジャンルの人との交流が出来るのはこの団体の特徴です。

正会員の会費は年額 **22,000 円**、**準会員**の会費は年額 **15,000 円**です。他に 30 歳未満の方を対象とした**青年会員（年額 11,000 円）**という特典制度があります。青年会員は役員の被選挙権を有さない以外は、正会員と同等の権利を有します。

◆賛助会員へのおさそい

本会の活動に協賛し、ご支援下さる方々を対象とした制度です。所定の年会費を納めて頂くほか、どのような資格制限も無く拘束もありません。どなたでもお申し込み頂けます。本誌「音楽の世界」を毎号お送りする他、本会が主催する演奏会などの事業に会員同様無料または会員割引料金で入場できます。

年会費は1口 10,000 円で、1口以上からお申し込みになれます。

◆会友制度について

会友には研究員と維持会友があります。

・研究員は本会を足場に、研究、音楽活動をして行く方々のための制度で、本会において研究員としての活動を認められた方々は、会の主催行事（コンサート、研究会など）について、会員に準ずる条件で参加する権利を有します。協力費として年額 5000 円の会友費が義務つけられますが、本誌「音楽の世界」を毎号お送り致します。

・維持会友は本誌や本会の活動に関心をお持ちの方は申し込みいただければ、どなたでも資格を得ることが出来ます。協力費として年額 5000 円の会友費が義務つけられますが、本誌「音楽の世界」を毎号お送り致します。

以上の記載事項について、詳しくは本会事務所（電話 03-3369-7496）へお問い合わせください。

日本音楽舞踊会議（TEL/Fax03-3369-7496・

e-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp）

シューベルトの「未完成交響曲」を完成に導く為の予備的考察・I

奇蹟としか思えない名曲

作曲：ロクリアン・正岡

シューベルト（1797～1828）は抒情家と評される作曲家であるが、にもかかわらず交響曲を結構書いていて、私は一番から六番（1818）までの全てを本稿を書く為に集中して聴いた。そしてこの未完成交響曲（1822）と呼ばれる七番（従来の八番）を改めて聴くと、あまりの次元の高さに音楽史上最大の奇蹟の“大化け”の印象を受ける（ベートーヴェンの2番と3番「英雄」との開きも大きい、あれは彼の人間力で説明のつくことだ。その後へ繋がる地力獲得の様子が有り有りだからだ）。ただし、脈絡無き瞬間的飛躍で、後の創作では、交響曲第8番（「ザ・グレート」）を聴けば明らかだが普段のシューベルトに戻っている。

シューベルトの作曲の特徴

それまでの6曲は、当時のウィーン楽派御三家を始めとする大家の交響曲の典型的な形を借りて来ては、そこに彼特有の楽想を流し込む、あるいは彩色する、といった体のものだ。そこで私たちは一応安心して彼の素朴さ、自然さ、純粹無垢さといったものを共にすることが出来る。それに、楽想がとめどもなく湧き出るタイプである上にハイティーンのころから書かれた交響曲ゆえか、幼稚園児が御遊戯したりはしゃぎまわっているような場面も数多い。こんな言い方をするのも、その音達に、楽曲という構築物（建造物と言っても良い）の素材たろうとする意志が感じられないからである。音が構築意志を感じさせる作曲家といえ、古い例だが、まずバッハやベートーヴェンであることに異論はなかろう。

別にシンフォニーでなくとも、作曲という営為には、最も大きく分けて二つの面への配慮が必要である。人間にとっての音楽というものが、二つの現れ方をするからである。音現象としての時間的推移と、静かな構造体（＝脳裡に出来て行く無の建造物）との、この両面である。単に鼻歌に毛の生えたようなよほど安易な音楽でない限り、一般に作曲家というものは、楽曲を作る場合、モーツァルトを唯一の例外として、上記二つは別ものとしてしか認識できない。それは一般に人間というものが時間と空間を別物と感じ取り、なおかつ別物としか思えないようなものである。

日本人もシューベルトも作品よりも音楽重視

にもかかわらず、一般の方が持つ音楽のイメージは、まずは音の移ろい現象であり、作曲という営為についてもそれに沿った見方をしがちだ。即ち「作曲家というのはどんどん頭に音が浮かぶ人でしょ。音楽が泉のようにわき出でる人たちでしょ」と。これは片方落ちの見方には違いないが、シューベルトほどそれに叶う作曲家はクラシック一流どころの御歴々の中にもいないようだ。

我が国における西洋音楽導入期、それも古い時代であればあるだけ、作曲家を目指し、実際に成った諸先輩の中にも、「シューベルト（志向）タイプ」の方々は多かったと言えよう。「楽曲というのは要するに音楽でしょ、作品である前に！」と

いった発言があったかどうかは知らないが、そう思えてならないのは、四季が美しく四方海に囲まれ母的自然環境の中で育まれて来た心情は、音楽に一にも二にも感情の発露を求めるだろうからだ。

ところが、全部で6作も未完成交響曲がある、という矮小さを伴っているものの、いきなり、シューベルトには例外的な偉大さを兼ね備えた交響曲七番の出現である。

トニカの潜在力を引き出した、盤石の第一楽章

第一楽章を見てみよう。聴く者にとってすら、もうそれまでの交響曲の第一楽章と別世界である。とても24,5歳の若者の曲とは思えない（かの大シンフォニカーのベートーヴェンですら、初シンフォニーは30歳での完成だ）。出だしからして、深淵の空気を深呼吸するようなモチーフではないか。それはシンプルで根幹性をもった構造のものであるゆえに内発的に新たな生命を生み出す力が旺盛である。故に、そこから派生的に生じたモチーフ達にも無理がなく、其々の対旋律のようなモチーフ群とで隅々まで埋め尽くされ、この楽章は伸び伸びとした音楽的動向を示しつつも見事な統一感の内に終了する。

外形だけでなく、その音楽的内容や構造からして、トニカに重心をおいたままにトニカに始まりトニカに終わる座りの良さを有している。

それでも、如何にもシューベルトらしいのは、構築意志を持った音は一つもないというところである。彼は音に構築とか建設とか言った強制労働を決して負わせようとしない。音楽自体が自らの力で生長繁茂（開花結実）してゆく。この楽章の終わり方一つとっても正にそうだ。なんというしなやかな強靱さであろうか。まさに生命そのもの息づき。彼はこの作品に於いて、構築力を獲得したのではなく、「交響曲の作曲には構築力が必要不可欠だ」という常識を覆して見せたのだ。いや、そのような意識を持ってはシューベルトらしくない。シューベルトはただただいつものように、ミューズの女神よりいずるものを必死に書きとめたにすぎなかった。ただ、その時、訪れたミューズの女神の方こそ、受容者としてのシューベルトの成長に合わせるかのようにいつものそれとは大きく違っていたということであろう。ただ、シューベルト自身の態度としては、いつものとおり女神に対しあくまで従順で有り続けようとしていたということだろう。

この第一楽章は、私たち地球人が、いつのまにか遠くから青い星を眺めるようにこの地球を望み見ている、という状況が浮かんでくるのであるが、いかがだろうか？

未完成を運命づけた第二楽章

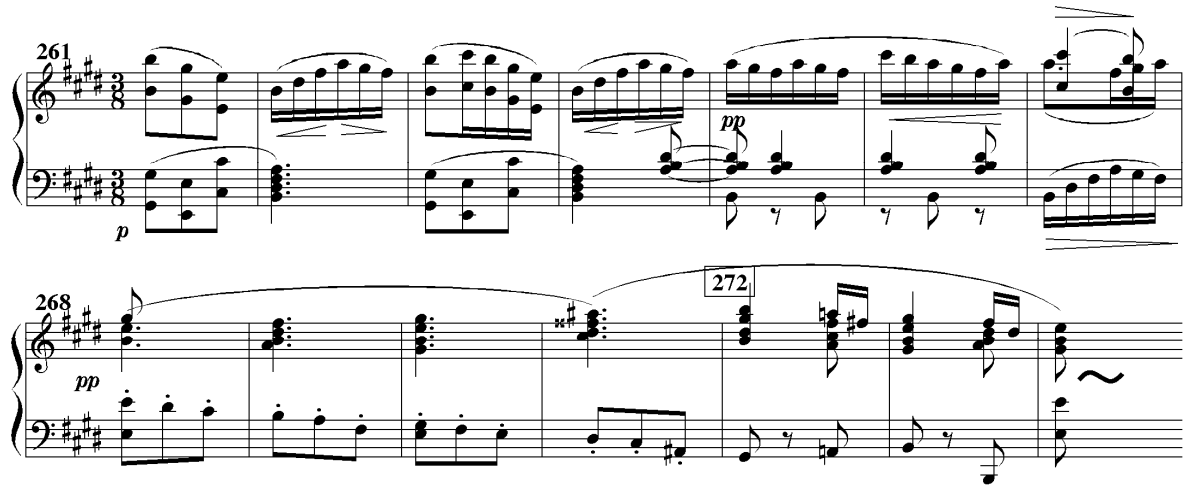
「この曲は二楽章までで完成している。4楽章形式の慣習に合わせる必要はなく、作曲者自身それを悟ったまでのこと。」というのは賢しらで結果につき従おうとする退屈な考え方であり、シューベルトが聴いたら神経を逆なでされる思いがすることだろう。

第三楽章を書きかけてみたものの、とてもじゃないが二楽章までの次元の高さを保てるようなものではない。普段の彼に戻ってしまったのだろうか？何かのはずみでか？

そのはずみは第二楽章の中にあったのである。

もう、10年ほど前のことに成るが、久しぶりにシューベルトを味わおうと録音で聴いていて「あれ！何か違う」と思える箇所があったのだ。私自身の意識の躓きに、音楽の瞬間的ながら脱線を覚えた。そのあと、音楽は美しさを保ったまま続くのだが、それはもうシューベルトが逸脱行為を犯した後のことゆえ、取り澄ましても駄目である。そのよそよそしさ、何気なさに、却って、わざとやったことが気に成り始めたのである。

シューベルトの判断ミスだ！まさに「シマッタ！」ことを彼自身がした為に、二度とその世界に戻ることは出来なくなってしまったのである。結果は図抜けた最高傑作の中途挫折。



第二楽章の272小節目（譜例参照）-長調、階名読みで「ソーファレ」（273の「ミーレシ」へと続く）箇所こそ、彼が、この壮大にして“霊験あらたか”な聴覚的世界から外へ出て「シマッタ」瞬間なのではなかろうか。ミューズの女神とのランデブーを打ち切ろうとしたシューベルトに、私はやりきれない思いがするのだが。

ところが、第二楽章の272に至り、そこから身を引くような真似をしてしまった。あとはその世界に対し客観的となり、回想するような楽想が続くことと成る。実際、私には、それまでそこに内在していたある星の周辺の宇宙空間を見詰めながらも後ずさりしてゆく何者か＝鑑賞者＝わが身の有りようがひしひしと感じられてならない。われわれに不自然な行動をとらせるシューベルトの、一体何がまずかったのか、検証を続けよう。

272と言えば、もう第一楽章と同じような長さに近くなり、「もうそろそろ」とこの楽章を切り上げる気持ちに成ったとしても、普通に考えれば可笑しくはない。さしもの「音楽の泉自身」たるシューベルトも、此处へ来て現実の時間に目覚め、作曲家としての最低限度の対応を迫られたのである。この時ばかりは音楽よりも作品についてのシューベルト！これは確かに構築型の音楽ではなく流露型の音楽ではある。とはいえ、音楽自身としても始まりたい気持ちばかりでなく終わりたい気持ちだってあろう。「流れが止まる」と言えば生命の終焉を連想させ少々聞こえが悪い

が、不自然ではなくその楽章を終わらせるためには、音楽自体が自（みずか）ら休止する方向へ持って行く必要がある。

要は、音楽の休みたがったり終わりたいがったりする性向に上手に合わせて曲を終わらせればよいだけの話で、それだったらシューベルトがいつもやっていることではなかったか。たしかに交響曲のような長い作品でなければ、シューベルト自身が歌うことが音楽することであり、歌い終わりが即ちその小品の終わり、ということで問題は生じにくい。これは作曲家を選ばず一般的に言えることであろう。しかし、曲が長くなり要素も増え複雑化して来ると、どうしても、そう、モーツァルトでもない限り、音楽自体を客体化せざるを得なくなってくる。その場合、音楽は植物か、せいぜい盆栽のような、ともかく生き物であり、それに対し極めて謙虚な姿勢がそれを育てる者、いじる者、作曲者に求められるのである。シューベルトはまさに 272 で未だ休みに入ろうともしていない「植物」の気持ちを無視しつつ布団へ寝かしつけた格好だ。それでも音楽現象としての体は世間的に立派に保たれ続けているところが甘さと厳しさのミックスしたこの世の中らしいとも言えよう。

この話は、同じ作曲家でも現代音楽の作曲家には本当には分からない方々が多いのではなかろうか。むしろ、同じ現代音楽でも演奏者の立場に立たれる方々の方が理解も共感もしやすいのでは、と思われる。というのは、音楽自体にまるで縁のない曲をそれこそ構築し、「音楽化は演奏者の仕事」と後に委ねる気持ちが丸見えの現代音楽作曲家が余りにも多いからである。私は、それを時代精神の悪しき現れだと思う。それは音響作品の創出かもしれないが、音楽としてみれば捏造に過ぎないからだ。

そういう見地からすれば、272 を書いた刹那のシューベルトは、たったの一瞬だが、タイムマシーンで現代に移動したとも言えよう。その場合、書き加えなければならないのは、素朴な音楽家である彼には、たまの人工的なわざの行使に対する抑止機能など持ち合わせてはいなかった、という事である。

進行方向を誤った第 268 小節目

覚めた瞬間があるとすれば、通常、叩き起こされたのでもない限り、それに先んじる醒めかける時間帯というものがあろう。

実は彼に「シマッタ」行為を必然化させる音楽の流れが少し前に用意されている。この楽章で何度か出て来ては繰り返される属和音上での 16 分音符による長調音階名「ソシレファミレ」というフレーズがここへ来て更に 3 小節も引き延ばされた後、しっかりトニカへと落着させられているのである。この、ほとんど完全終止している箇所は第 268 小節目である。さすがはシューベルト、これによって、シマッタ 272 は一般の聴き手に全く不自然に感じられず、また、268 はこんな穿（うが）った見方をしがちな私にすら聴いた瞬間は不安を与えるどころか一種の満足感を覚えさせつつ、272 を体験した後の振り返りによらなければその重大な過失？に気づかせもしない、という次元の高さなのであった。いや、シューベルト自身も、268 を書きつけるとき、現象としての音楽に不自然さを覚えはしなかっただろう。（先ほども触れたが）そのあとだって、音楽現象としては十分に美しさが保たれているのだ。

だが、268においてこの宇宙的楽想空間に輪郭を与えた瞬間に、シューベルト自身、その外へと締め出され、あとは、さよならするしか無くなった、と私は見る。

もともと構築家ではないと言うか音楽の対象化を得意とするタイプでないシューベルトのこと、自分自身が身を以ってこの楽想の世界から遠ざかる（という内的パフォーマンス）までしなければ、この楽章を（アタッカでなく正規の方法で）終えることが出来なかったのではなかろうか。そして筆者にそう見えるのは、作曲者が自分のやっていることを音楽で表わすことにも成功しているからではないのか。

形ある物にはへりがあり、形を与えるということは、それを個体として周囲から独立させることである。ところが一方、音楽は生命であり、生命ある者は常に呼吸や新陳代謝をし続けなければならない。つまり完全な独立とか自立とかはありえず、周囲との連続性が保たれ、周囲に生かされている、というありかたをとるほかはない。

先ほども言ったように、母なる国土と自然とに恵まれた日本人にとって、シューベルトの音楽は何となじみの良いものなのだろうか。とりわけ交響曲7番の第二楽章は最後の最後まで、日本人の耳に一滴も残さず沁み込むほどのものではないのか。

シューベルトがミューズの女神「美空ひばり」を裏切る

現象としての音楽としては、最後の最後までうまく事が運んでいる第二楽章である。

最高の仕上がりだ、と言っても信じる人が圧倒的に多いだろう。第一楽章に十分匹敵する、とも。

だが、音楽というものには、音楽現象よりも深い領域があるのだ。それは聴覚内の形態的、構造的な無のあり方と言えるが、ただし、歌謡的なシューベルト音楽におけるそれは、決してブロックを積み上げたようなものではなく、植物の如き生き物なのである、

第二楽章は、始めから終わり近くまで、小さな尺度で見ても、中ぐらいの尺度で見ても大きな尺度で見ても歌謡的である。それは大きな“たゆたい”だ、と言っても良いほどだ。その中空に浮いたような主題にご注目あれ！

彼は、第一楽章との大きな違いを始めから十分に承知しつつ書き進めて来た筈だが。

この楽章に於いては主役は、転調を重ねる中、ほとんど常に第V音、すなわち階名でソと歌われ得る音なのである。ソは空であり、ドは土であるとは、この際、語呂が合って生じてしまうところの洒落など無視して真摯に申し出たいものである。

268のトニカへの終止に問題が生じたのは、むしろ、それまでの主役が階名ソであったというこの楽章の持つ特徴をシューベルトが十分に弁えていなかったというところにある。いくら対象化の得意ではないシューベルトとはいえ、最低限度の客観性があれば、I-Vという全終止を、正攻法で有るとはいえあのように諸に使うことは避けた筈なのである。くどいようだが、これはもう、音楽現象のレベルの問題

ではない。シューベルトの、そして鑑賞者の音楽的想像力とか心の姿勢とかのレベルの問題だ。

あの青い空に頭を伸ばしているような冒頭主題を思い出してほしい。

この楽章でのミューズの女神の名は名付けてみれば「美空ひばり」というべきか。これも、洒落などではない。なぜなら、その後も、転調を続けに続ける中、主役はあくまで空に舞うひばりの如き階名のソであって、シューベルトは少年のごとくそれを追いつけるというシーンすらあるほど（C f. 練習番号C、第111小節目～「譜例は次号に掲載」）その出会いの場はあくまでも空にあったのだ。

あるいは、自己支配力の欠如からか？

第二楽章、280以降を聴いて、つくづく回想している、かつ、させられている感じがする。曲の途中で誰がこんなことをするか？！表だった意識と意志においては三楽章以降も作るつもりでありながら、何となく全曲を終える気持ちが意識の裏あるいは陰に生じていてそれに動かされてしまったようにもとれる。その証拠になりそうな、彼にしては珍しい念の入った終結の仕方である。結果は皮肉にも不幸中の幸いというか、三楽章以降の欠損感はかなり緩和されており、傷物の印象も軽減されている。あたかも、原調ではないとはいえ終楽章の最後に来るはずのものが早々第二楽章に来てしまった、という印象なのである。

シューベルトはどの曲を聴いても音楽が柔らかい。モーツァルトとは違ってアナログ感に満ち満ちている。一瞬の照射感はないが絶え間なき流露感がある。彼の音楽を聴く我々と同じようにその音楽を時間的に体験して居たであろう彼を信じることが出来る。そして、モーツァルトと違い、才能ばかりでなく柔らかな意識も手伝ってこそ、大いなる女神からの波動に感応できたのであらうとすら思える節がある。意志に拘束されない彼の意識！詰めのところでそれが裏目に出た。一流の作曲家は一体に意志が強いが、シューベルトの意識の柔らかさは我々凡人の物でもある。だから、その音楽は「お堅いクラシック音楽」であるにもかかわらず親しみやすい。偉い人には違いないが、わずかに兼ね持つ危なっかしさが魅力のシューベルト、そしてその音楽である。

いずれにせよ、人類が誇るべきこの大傑作を、このような中途半端な形のままに放置しておく、というのは誠にもったいないし見方によっては無惨ですらあると、私は思う。シューベルト自身も、空しい努力ながら第三楽章を中途まで書き遺しており、他の未完成作品とは違って、この第七交響曲への思い入れは格別強く、出来ることなら仕上げたかっただろう、と推察されるのである。今からでも遅すぎると言うことはない。誰かがやらなければならない課題である「未完成的交響曲」の「完成」化！

その為に役に立つであろう考察を、次号まで続けよう。

（ろくりあん・まさおか 本会 作曲会員）

日本音楽舞踊会議 作曲部会公演

作曲部会作品展2013

2013 年 6 月 14 日（金）18:20 開演

すみだトリフォニー 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議 作曲部会／後援：月刊『音楽の世界』

《ごあいさつ》

本日はお忙しいところ日本音楽舞踊会議（CMDJ）作曲部会作品展にご来場下さいまして有難うございます。

1962 年に創立された日本音楽舞踊会議の中でも活発に活動して来た作曲部会会員の新作発表の場として、また旧作再演の場としてほぼ毎年開催しております。今回は特にテーマを設けず、出品者夫々の得意の分野の作品が 8 作品上演されます。また、編成もソロから 10 名を越える作品、ピアノやヴァイオリン、声楽曲のほか邦楽器の作品も有り、バラエティーに富んでいます。どうぞ、最後までご鑑賞いただき、御高評を頂戴出来れば幸いです。

作曲部会会長 高橋 通

出品者一同



《プログラム》

① 金藤 豊 Yutaka Kanetoh

静御前に捧ぐる挽歌(2006)

- 1 平家壇の浦に亡ぶ
- 2 一の谷合戦とみちのく挽歌
- 3-1 武蔵野を行く静とその情景 3-2 頼朝 義仲 義経のあらそい
- 3-3 静のなげき 4 静のうたと終曲

sop. 河内紀恵 上村聡子 栃木篤子 林 志乃
mez. sop 金田香織 樺沢わか子 新明裕子
alt. 中嶋啓子 甲斐川ゆき子 田中正子 塚越由香里
perc. 林瑞穂 pf. 西村晶子 尺八 山下孝太郎 cond. 中嶋恒雄

② 穴原 雅己 Masami Anahara

島崎藤村の詩による2つの秋の歌

1. 秋に隠れて (2013) 初演 2. 秋風の歌 (2003)

mez. sop 佐藤まどか pf. 藤中智香子

③ 古澤 彰 Akira Furusawa

「No meaning-ピアノと弦楽器のための」(2013) 初演

Pf. 森山理美 vn. 柏木かさね vc. 成田七海

④ 高橋 雅光 Masamitsu Takahashi

“ピアノのための「カプリチオ」”(1983)

pf. 松山 元

----- (休憩) -----

⑤ 中嶋 恒雄 Tsuneo Nakajima

小磯仁の詩による「海の約束女声合唱のための」(2013) 改訂初演

1. 海の黙契 2. たったひとつの帰郷 3. 無声の文字
4. 永遠の帰郷 5. 間奏と終曲-海の約束

sop. 河内紀恵 上村聡子 栃木篤子 林 志乃
mez. sop 金田香織 樺沢わか子 新明裕子
alt. 中嶋啓子 甲斐川ゆき子 田中正子 塚越由香里
pf. 西村晶子 cond. 中嶋恒雄

⑥ 高橋 通 Toru Takahashi

「箏独奏ソナタ第8番」(1968)

箏 高橋澄子 Toru Takahashi

⑦ 北條 直彦 Naohiko Hojoh

「変容-ソロ・ヴァイオリンのための」(2010)

Vn. 恵藤久美子

⑧ 桑原 洋明 Hiroaki Kuwahara

『御佛の四つの本願』より (2012) 初演

3. 法門無尽誓願学 4. 佛道無上誓願成

pf. 鈴木菜穂子

《曲目解説・出品者／演奏者プロフィール》

①金藤 豊 静御前に捧ぐる挽歌

- 1 平家壇の浦に亡ぶ 2 一の谷合戦とみちのく挽歌
3-1 武蔵野に行く静とその情景 3-2 頼朝 義仲 義経のあらそい
3-3 静のなげき 4 静のうたと終曲

「どうして利根川の土手下に静御前の墓があるんだ」、真っ先に思ったのはこの一事である。それから何回も足を運んだ、6、7回か、もっとか。そしていろんな事が思われるのである。

静は鎌倉へ連れて来られた、そして子供を生んでいる。男の子だったので海に捨てられた。それは臨月の女性が京都から鎌倉まで、乗り物か馬の背か、戸板かそれとも歩いたか——。そしてほうり出されたであろう。あげく平泉を目指して北に向かったら、利根川に突き当たる。病気で死んだらしい。

義経さんのことは、曲を聴いてください。（金藤 豊）



【金藤 豊（かねとう ゆたか）】

1931年尾道に生まれる。広島通信講習所卒。ギターを國藤和枝、作曲を伊藤昇、清瀬保二、ヴィクトル・セアール各氏に師事。昭和20年終戦の年、疎開先の高田郡向原の寺の境内より、広島への原爆投下を望見する。ヴァイオリンソナタ第2番（西行ソナタ）、被爆者の葬煙（尺八、ピアノ）、白川の関（宮沢章二詩 女声合唱）等多数の作品がある。

【山下孝太郎（やました こうたろう）：尺八】

佐藤洞雲、宮田耕八朗氏等に師事。各流派を学ぶ。
アメリカ、イギリス、フランス等国外及び国内で演奏活動をする。
現在上尾芸術協会会長。音楽工房「一音会」主催。



【林 瑞穂（はやし みずほ）：打楽器】

2008年東京芸術大学音楽学部器楽科打楽器専攻卒業。
東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団等に出演。
東雲打楽器2重奏団を結成し、この7月には第2回の演奏会を開き、日本の現代曲を演奏する。

《以下 合唱＋ピアノ伴奏者》

【河内 紀恵（かわい のりえ）：ソプラノ】

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。
日伊声楽コンクール、日本声楽コンクール入選。畑中良輔、東敦子氏等に師事。現在草加市演奏家協会会長。リサイタル他多くのコンサートに出演。

【上村 聡子（うえむら さとこ）：ソプラノ】

大分県立文化短期大学声楽専攻卒業。
東京尚美コンセルヴァトアールディ
プロマ科修了。

田中正子、中村浩子氏等に師事。2008年フランス音楽コンクール2位。
日仏協会関西賞、フランス総領事賞、
エールフランス賞受賞。



合唱メンバー 中央はピアノ担当の西村昌子

【栃木 敦子（とちぎ あつこ）：
ソプラノ】

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。同大
大学院修了。関西日仏音楽コンクール入選。
横井順子、中村浩子氏等に師事。現在
東京音楽学院講師。

【林 志乃（はやし しの）：ソプラノ】

東京尚美コンセルヴァトアールディプロマ科修了。二期会オペラ研修所修了。
中村浩子、竹村靖子氏等に師事。第42回フランス音楽コンクール入賞。フランス総領事賞受賞。

【金田 香織（かねだ かおり）：メゾ・ソプラノ】

東京音楽大学声楽演奏家コース卒業。中村浩子、大川隆子氏等に師事。

【樺沢 わか子（かばさわ わかこ）：メゾ・ソプラノ】

フェリス女学院音楽学部声楽学科卒業、同大学院修了。ドイツカッセル音楽院声楽課程修了。
ドイツ、パダーボーン市音楽学校講師を経て、現在東京室内歌劇場会員。

【甲斐川 ゆき子（かいがわ ゆきこ）：メゾ・ソプラノ】

昭和音楽大学音楽学部声楽科卒業。
徳田京子、佐藤富美子等に師事。現在プロ合唱团日本合唱協会会員。

【新明 裕子（しんめい ゆうこ）：メゾ・ソプラノ】

東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。東京尚美コンセルヴァトアールディプロマ科修了。
板倉容子、日比啓子氏等に師事。現在日本演奏家連盟会員。

【中嶋 啓子（なかじま けいこ）：アルト】

山梨大学教育学部卒業。ミラノ音楽院留学。
片野坂栄子、M. グリエルミ氏等に師事。多くの演奏会に出演するとともに、昨年6月にチェコ、クロムニエージュシュ現代音楽祭に招かれ、好評を博した。

【田中 正子（たなか まさこ）：アルト】

福岡女子短期大学、東京芸術大学音楽学部
声楽科卒業。中村浩子、川口雪子氏等に師事。現在東京音楽学院講師。
塚越由香里（alt.）東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。桐朋学園大学声楽専攻研究科修了。多くの
演奏会に出演する。

【西村 晶子（にしむら まさこ）：ピアノ】

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。

フランス、ブローニュ音楽院ソルフェージュ科首席卒業、マルセイユ音楽院マスタークラス修了。伊達純、ジャック・ルウ・イエ氏等に師事。

【中嶋 恒雄(なかじま つねお)：指揮】⑤参照

② 穴原 雅己 島崎藤村の詩による2つの秋の歌

1. 秋に隠れて(初演)
2. 秋風の歌

島崎藤村のこの2つの詩は、『藤村詩抄』に収められたもので、元々、藤村の処女詩集『若菜集』所収の作品です。このうち、「秋に隠れて」は、詩も大変短いものですが、曲も小品というべきもので、本年1月に作曲し、今回が初演となります。一方、「秋風の歌」は、対照的に、歌曲としてはかなり長い作品で、構成にも色々と意を用いつつ2003年に作曲、初演は2006年2月で、同年11月にも再演されており(いずれもバリトン佐藤光政氏、ピアノ亀井奈緒美氏、日暮里サニーホールコンサートサロンにて)、それ以来の演奏となります。(穴原雅己)



【穴原 雅己(あなはら まさみ)】

群馬県生まれ。作曲を黒髪芳光、中島洋一の各氏に師事。作品には、管弦楽曲・室内楽曲・ピアノ曲・声楽曲などがある。「2003ひびけ野ばらコンサート」作曲募集(松本市)佳作、群馬県童謡作詞作曲家協会主催第10回及び11回童謡作曲コンテスト入賞。当会をはじめ、日本童謡協会主催の公演(童謡祭、こどものコーラス展)などでも作品を発表している。日本音楽舞踊会議会員、日本童謡協会会員。太田市役所勤務。



【佐藤 まどか(さとう まどか)：メゾ・ソプラノ】

国立音楽大学声楽科、同大学院オペラ科修了。二期会オペラスタジオ34期で優秀賞を受賞し修了。在学中に『フィガロの結婚』ケルビーノでオペラデビュー。『コシファンツウッテ』ドラベッラ、『魔笛』ダーメ、『ヘンゼルとグレーテル』ヘンゼル、『ラインの黄金』フリッカ、他たくさんのオペラに出演。文化庁オペラ公演『小さな煙突掃除』サム、『カルメン』カルメンでは全国各地で公演し子供たちに歌声を届けている。コンサートでは『第九』『レクイエム』『メサイア』などのソリストを務め好評を得ている。また親善大使として日本アルゼンチン修好100周年記念演奏会に出演し、その好演は南米各地のメディアに大きく取り上げられた。豊かな声量と幅広い声域を生かしオペラ、日本歌曲、フランス歌曲、オペレッタ、タンゴなど多彩なレパートリーで活躍している。二期会会員。



【藤中 智香子(ふじなか ちかこ)：ピアノ】

武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを世川岬子、エーリッヒ・アンドレアス、オルガンを志村拓生の各氏に師事。第29回文化放送音楽賞入選。コンサート活動として、岬会、アンサンブル・シュゼット等出演。伴奏者としても、合唱団のほかに声楽家とのディオニソスコンサート等、多岐に渡って行っている。

③ 古澤 彰 「No meaning-ピアノと弦楽器のための」

戦前戦後に隆盛を見せた前衛や実験音楽は飽和し、新しい発見が生まれなくなったと言われて久しい。その為、現在は現代音楽シーンでも再び調性回帰も 傾向も強い。しかし調性曲から新たな潮流が生まれるかと言えば、それは言うまでもなく非常に困難である。芸術音楽界で名声を得る為には、格式ある作曲コンクールに入賞する事が最も手っ取り早い。それ故、作者も入賞を目指し出品を続けているが、そこでは作者本人の美学より、入賞を狙いやすい傾向の書法で作曲する事にプライオリティが 置かれる。その一方で作者は自分の持つ現代的なフィルターを介しつつも、普遍的な価値の追求を体現したく以前から思っていた。その為、今回は無の境地を目指すべくタイトルを『NO MEANING』と名付けた。

(古澤 彰)



【古澤 彰（ふるさわ あきら）】

これまでに作曲を鶴原勇夫、辻田幸徳、斎藤弘美、川島素晴、音響 学を富田勲、古山俊一、岩竹徹らの各氏に師事。

尚美学園大学・音楽表現学科を経て、現在は慶應義塾大学院・政策メディア研究科に在学。

【森山 理美（もりやま りみ）：ピアノ】

1988 年ニューヨーク生まれ。

16 歳でソロデビューリサイタル「オール・ショパン・プログラム」を開催。2001 年より海外においての演奏活動を開始。これまで国内外でのコンクールにおいて受賞多数。

現在、慶應義塾大学大学院理工学研究科に在学中。



【柏木 かさね（かしわぎ かさね）：ヴァイオリン】

神奈川県小田原市出身。5 歳よりヴァイオリンを始める。これまでにヴァイオリンを小池賢治、清水高師、永峰高志各氏に師事。またバロックヴァイオリンを若松夏美氏に師事。

第50回東京国際音楽協会新人オーディションに合格。また同協会より助成金を得て2012年ウィーン国立音楽大学冬季マスタークラスに参加。

【成田 七海（なりた ななみ）：チェロ】：

3 歳よりピアノを、12 歳よりチェロを始める。

東京芸術大学音楽学部附属音楽高校を経て現在、東京芸術大学4年在学中。

これまでにチェロを羽川真介、河野文昭、上森祥平各氏に、現在藤森亮一氏に師事。

室内楽を松原勝也、市坪俊彦、花崎薫、山本裕康、東誠三各氏に師事。



④ 高橋 雅光 “ピアノのための「カプリチオ」”(1983)

日本の伝統音楽・民俗音楽の中には、民謡の「馬子唄」のような即興的でメリスマ（微細な節回しをする）的な無拍節な要素と、「佐渡おけさ」のような有拍節の要素及び、浄瑠璃や浪曲のような「語り物」音楽の中には、有拍節の中にメリスマ的な要素が含まれているものもあるが、その有拍節・無拍節の部分をこの作品の基本形式とした。

楽曲の展開方法も、西洋音楽は動機を構築・造形するように展開するが、この作品は、主題を拡大縮小・順行反行等少しづつ形を変えながら展開していくように作られている。

ハーモニーも旋律とは関係のない和音を使用し、「能」の謡と能管の関係及び「歌舞伎」の長唄と笛の関係のように、溶け合うというよりは音を外す塩梅（あんばい）する効果や、その発展形であるポリモード（多調的な複合された旋法）・ポリリズム（ずらされたりズム・複合リズム）・「オトシ」（連打しながら音をすり上げたりする効果）等、日本の民族的体質である、微妙微細で音色的な効果を生かすよう工夫した。

これらの効果は、インドネシアの「ケチャ」に代表されるポリリズムや南アフリカのポリリズムにも共通する効果である。

ピアノという平均律による打弦楽器をトーンクラスター（和音の音群・音の塊という音群）という方法も用いながらも、全体的に流れるモード（旋法）は「我が心の民謡」である。（高橋 雅光）



【高橋 雅光（たかはし まさみつ）】

作曲を安達元彦氏、岡田京子氏に師事。管弦楽法をモスクワ音楽院管弦楽法主任教授のカレン・ハチャトゥリアン氏に習う。

第2回日本音楽集団作曲コンクール第一位入賞。1977年度作曲賞を受賞。'84年5月第二回モスクワ国際現代音楽祭に、故芥川也寸志氏、故寺原信夫氏等と共に、ソヴィエト文化省・作曲家同盟の招待参加。

一昨年・昨年と2年連続（公社）日本尺八連盟主催全国尺八コンクールのファイナル審査委員。尺八の古典・本曲・現代曲・アンサンブル部門の審査委員。

日本現代音楽協会会員・日本作曲家協議会会員・本会理事・出版局長・楽譜出版部長・本会作曲部会副部会長・「音楽の世界」誌編集部員。



【松山 元（まつやま げん）：ピアノ】

ドイツ国立ケルン音楽大学卒業。

ピアノをアロイス・コンタルスキー、室内楽をアマデウス弦楽四重奏団の各氏に師事。

国内はもとより世界各地で活発な演奏活動を展開する他、著名国際音楽祭での招待演奏、

国際ピアノコンクール審査員、国際ピアノ講習会講師等にも度々招聴される。平成12年文化庁派遣芸術家在外研修員、及びフンボルト大学客員研究員。

又ベルリン芸術大学で教鞭を執る。第28回中島健蔵音楽賞受賞。

クラングフォルム・ベルリン（ベルリン・フィルメンバーによる室内楽奏団）代表

⑤ 中嶋 恒雄 小磯仁の詩による「海の約束女声合唱のための」(2013) 改訂初演

この曲は2001年に作曲され第16回アルビレオ音楽展で試演されたが、此のたび改訂を加え、合唱曲として初演されることになった。曲はヘルダリーンの研究家として国際的にも知られている山梨大学元同僚の小磯仁名誉教授の詩によっている。内容は氏の出生の地、房総館山の海を背景に、氏の生への姿勢が抽象化され、重く、しかし希望をもって歌われている。私はこの曲を、詩人小磯氏との長年にわたる真摯な交友への感謝の返礼として、氏に献呈したいと思う。(中嶋 恒雄)



【中嶋 恒雄（なかじま つねお）】

東京芸術大学音楽学部作曲科、指揮科卒業。1984年カリフォルニア大学サンディエゴ校研究員。上野学園大学、東京学芸大学など多くの大学で講師を勤めるとともに、文部省大学設置審議会委員長、教科用図書検定委員など、日本の音楽大学行政、教育行政に関わる多くの仕事をした。1990年第1回山梨県文化奨励賞受賞。現在山梨大学名誉教授。財団法人音楽文化創造参与。指揮活動としては、1988年に宮城会アメリカ公演に参加し、シアトル、ロスアンゼルス、ニューヨークで演奏した。



【小磯 仁（こいそ ひとし）：詩】

慶應義塾大学文学部修士課程修了。ドイツ、ウエルツブルク大学専任講師を経て、現在山梨大学名誉教授。「ヘルダリーン 愛の肖像」（岩波書店2004）等多くの著作、論文がある。

【演奏：sop. 河内紀恵、上村聡子、栃木篤子、林 志乃／mez. sop 金田香織。樺沢わか子
甲斐川ゆき子、新明裕子、／alt. 中嶋啓子、甲斐川ゆき子、田中正子、塚越由香里
pf. 西村晶子／指揮：中嶋恒雄】

（演奏者のプロフィールにつきましては①を参照してください。）

⑥ 高橋 通「箏独奏ソナタ第8番」

第1回高橋澄子箏リサイタル（大和証券ホール・1971年）において初演。

第1楽章は段物風の二段構成であり厳格ではない12音技法に拠っている。第2楽章は弾かれた絃の音色と余韻に重点を置いた音楽。第3楽章は躍動的なリズムの間に陽気な旋律が現れ、半音の変化で色合いを付けている。各楽章は全く違った雰囲気音楽であるが調弦は同じである。どれも短く殆ど間をあげずに演奏される。（高橋 通）



【高橋 通（たかはし とおる）】

日本医科大学大学院卒業。医学博士。ピアノを故川村蔦子氏、作曲を田辺恒弥氏、一絃琴を故山本游魚琴師に師事。作曲の他、一絃琴の演奏家としても活動している。

日本音楽舞踊会議（CMDJ）会員（作曲）、（社）日本歌曲振興会会員（作曲）に所属。幽意一絃琴鳴琴会を主宰。箏サマーコンサートの会代表。「すばるの会」代表。



【高橋 澄子（たかはし すみこ）：箏】

神奈川県小田原市出身。東京芸術大学大学院卒業（生田流箏曲専攻）。故吉田恭子、故宮城喜代子、故宮城数江、故小橋幹子、故上木康江、矢崎明子の諸氏に師事。古典箏曲から現代音楽までの幅広いレパートリーを持ち、白井英治氏（Vn）、ウィーンフィルのシャーギアル氏（Vn）、ベルリンフィルのリーバーマン氏（Vn）、オットー・ニコライ弦楽四重奏団、ウィーン・ザロデック弦楽四重奏団、ウィーンフィルのダニエル・ゲーデ氏（Vn）など内外の著名な演奏家と共演。過去5回のリサイタルでは、八重衣などの古典の難曲、越天楽変奏曲（箏の協奏曲）、ヴァイオリンと箏のためのソナタ（高橋通作曲）などの幅広いレパートリーを演奏し高い評価を受けている。平成16年南フランス演奏旅行、平成20年ストックホルム演奏旅行。宮城会大師範。森の会々員。ことサマーコンサートの会および「すばるの会」を高橋通と主催。つばみの会々主。平成15年、高橋通の作曲作品によるCD「箏の世界・I＜花と月と…春秋＞」を制作・発売。

⑦ 北條 直彦 「変容-ソロ・ヴァイオリンのための」(2010)

この曲は二律背反する内面の葛藤、揺れ動く心理の音による照射であり、それを変容と云う手法をとりつつ、その先にある何かを見つけるべく目指したものである。曲は二つの対照的な要素とその闘ぎあいを中心に据えつつ進行する。ある所では邦楽的な気分も一つの要素として加わるが、それもいずれは全体の中で溶解し夢の後となる。初演は恵藤久美子氏。今回、若干の手直しを行い、同じく同氏による再演の運びとなった。

（北條 直彦）



【北條 直彦（ほうじょう なおひこ）】

東京芸術大学作曲科卒業。池内友次郎、矢代秋雄、三善晃の諸氏に師事。主要作品『響相』～室内オーケストラのための～、“Interplay”～フルート、ヴァイオリン、ピアノのための～他多数。また、ジャズ様式の研究家、演奏家（ピアノ）でもあり、著書、楽譜出版多数。「アストル・ピアソラタンゴ名曲選」1、2巻、「新主流派以降の現代ジャズ技法」、「同2巻」「同3巻」等の出版がある。日本音楽舞踊会議理事公演局長。日本現代音楽協会会員。キーボードラボ主 宰



【恵藤久美子（えとう くみこ）ヴァイオリン】

3歳より母にピアノを、5歳より父にヴァイオリンの手ほどきを受ける。7歳の時、斎藤秀雄氏の薦めによりヴァイオリンの道を歩み始める。同時に桐朋学園「子供のための音楽教室」鎌倉分室へ入室。ヴァイオリンを鷺見三郎、鷺見健彰、海野義雄の各氏に師事。室内楽を黒沼俊夫、斎藤秀雄両氏に師事。第41回日本音楽コンクール第2位入賞。1972年、兄、堤剛と「二重奏の夕べ」を東京とカナダで開催。1979年、リサイタルで弘中孝氏と共演。2003年から毎年、現在迄、深澤亮子氏、安田謙一郎氏とピアノとヴァイオリンとチェロの夕べ、或はピアノと室内楽の夕べを開催。2004年、中野洋子氏とデュオリサイタルを開催。東京フィル、新日本フィルとメンデルスゾーンの協奏曲、札幌響とシベリウスの協奏曲、その他多くのオーケストラと協奏曲を共演しアマチュアオーケストラとの共演も多い。1975年より10年間、桐五重奏団のセカンドヴァイオリンとして活躍。1980年より2年間山形交響楽団のコンサートマスター。現在、アンサンブルアルス・ノバコンサートマスター、桐朋学園大学特任教授。日本音楽舞踊会議会員。

⑧ 桑原 洋明 『御佛の四つの本願』より

阿弥陀さまが法蔵菩薩と言うお名前で行われていらっしゃった折り、一切の衆生をお救いに成るべく四十八の誓願（本願）を御立てに成られました。その中の第十八願は帰依の念仏十回で阿弥陀さまがお作りに成られた極楽浄土に往けるとある事にいたく感じ入られた法然上人さまが中国の先達、善導師の御書を引き合いに出されて無学文盲の衆に称名をお勧めになったのです。それは学生（がくしょう）には受け入れ難いものでした。一生懸命、学問や修行に励んでも一向に悟れないのに称名十回で成仏とは、余りにひど過ぎますと。でも高弟、親鸞房もその事に一向、意に介しませんでした。自力で悟れないので阿弥陀さまの他力に御頼りする外ないのですよ と、よく唯円にお話しに成られておりました。

やがて膺たけられた法蔵さまは阿弥陀仏となられ、爾来、一切を御救い続けていらっしゃいます。何と心強い御事か。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とあと八回。

高い技倆をお持ちの鈴木菜穂子さんの演奏に期待し、快く初演をお引き受け下さった事に心より御礼申し上げる次第です。（桑原 洋明）



【桑原 洋明（くわはら ひろあき）】

国立音楽大学作曲学科卒業。高田三郎、島岡 譲，外崎幹二に師事。

管弦楽作品 津軽風土記。吹奏楽作品 三つの断章。弦楽作品四つの民謡。

室内楽作品 ピアノ奏鳴曲 伊勢之海。他

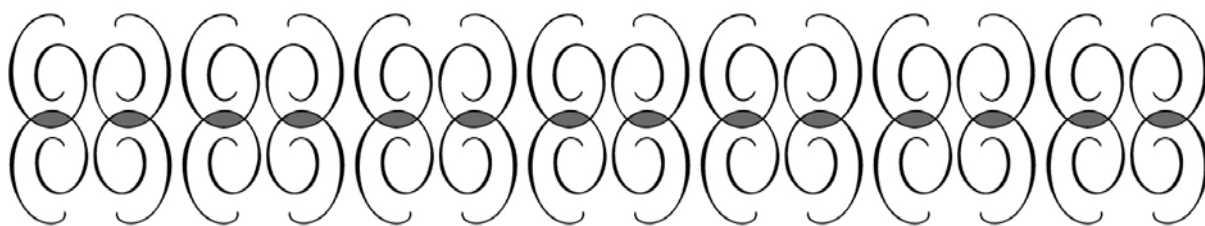
【鈴木 菜穂子（すずき なおこ）：ピアノ】

『東京都出身。3歳よりピアノを始め、YAMAHA 音楽教室にてピアノ、エレクトーン、作曲等を学ぶ。在籍中、JOC ドイツ・スイス公演にて自作のピアノコンチェルトを地元のオーケストラと演奏。

他、多数の国内外のコンサートに出演。

子供の為の音楽教室を経て、桐朋女子高等学校音楽科、同大学、同研究科修了。

現在はソロや室内楽、現代曲の新作初演などで活動中。これまでに斎木ユリ、徳丸聡子の各氏に師事。



会と会員の情報

1. CMDJ 会と会員のスケジュール

6 月

14 日(金) 日本音楽舞踊会議作曲部会作品展 2013

【すみだトリフォニーホール小ホール 17:50 開場 (18:20 開演)

全自由席 3,000 円 問合せ 日本音楽舞踊会議 Tel 03-3369-7496】

(詳細は本誌掲載のプログラムをご覧ください)

15 日(土) 芝田貞子・嶋田美佐子・高橋順子「平和のためのコンサート」

ゲスト：高橋哲哉(東京大学大学院総合文化研究科教授) アルプス音楽団
講演「犠牲のシステムから平和の秩序へー原発と基地問題を考える」他

【牛込筆筈区民ホール 14:00 2,200 円】

16 日(日) 並木桂子(Pf.) 共演：山中由香理(Cl.) 富永佐恵子(Vc.)

原宿・午後のひととき ～愛の贈り物～ シューマン：ファンタジー Op. 88、
ブラームス：クラリネットトリオ、ハンガー舞曲他

【原宿アコスタジオ 14 時会場 14:30 開演 3,000 円

(小学生以下 1,000 円) 要予約 問合せ 080-3003-2102】

20 日(木) 機関誌編集会議 19:00～ 日本音楽舞踊会議事務所

21 日(金) 西山淑子(EI.) エレクトーン伴奏によるピアノ初心者のためのピアノ

コンツェルト講座 【14:00～16:00 エレクトーンシティ渋谷 要予約】

24 日(月) 深沢 亮子(Pf.) 一翔の会 公開レッスン 【トモノホール 11:00～14:00】

7 月

3 日(水) 並木桂子(Pf.) ー 共演：印田千裕(Vn.)、富永佐恵子(Vc.)

ヴァイオリンとチェロとピアノのコンサート

ドヴォジャーク：ドゥムキー、モーツァルト：メヌエット、

ホルスト：ジュピター他 【中小岩小学校、公民館他 15:30～他 入場無料】

4 日(木) ピアノ部会第 26 回公演 ～華麗なる響き 2013～

【杉並公会堂小ホール 19:00 開演 全自由席 3,500 円

問合せ：日本音楽舞踊会議 Tel 03-3369-7496】

プログラム

1) 栗栖麻衣子&山下早苗(連弾)／ストラヴィンスキー：ペトルーシュカより

2) 太田恵美子／ラフマニノフ：ピアノのための前奏曲 Op. 3 No. 2 嬰ハ短調

13 の前奏曲 Op. 32 No. 5 ト長調, No. 12 嬰ト短調

3) 原口摩純／リスト＝ワーグナー：「イゾルデの愛と死」

リスト：超絶技巧練習曲 第 10 番 ヘ短調

4) 北川暁子／ショパン：アレグロ・ドウ・コンセール

5) 大矢絢子／ラヴェル：「鏡」より 洋上の小舟

6) 広瀬美紀子／助川敏弥：前奏曲集より No. 1, No. 5 (初演)

メシアン：前奏曲集より第 8 曲「風に映る影」

7) 戸引小夜子／ボルトキエヴィッチ：エチュード p. 15 7、9、10 番

8) 深沢亮子&草野明子(連弾)／シューベルト：幻想曲ヘ短調 Op. 103 D. 940

5 日(金) 声楽部会公演 歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート

～中山晋平 大正ロマンとその時代～

出演：歌の案内人&バリトン 佐藤光政

歌：浅香五十鈴・内田暁子・浦 富美・笠原たか・嶋田美佐子・高橋順子
吉仲京子・渡辺裕子
ピアノ：坂田晴美 【すみだトリフォニー小ホール 18:30 開演】

9 日(火) 深沢亮子(Pf.)ー共演：田原綾子(Vla.) シューベルト：アルペジオネソナタ
他
【新宿住友ビル 7 F 朝日カルチャーセンター 13:00】

21 日(日) 機関誌編集会議 14:00～ 日本音楽舞踊会議事務所

21 日(日) 「翔の会」20 周年記念コンサート 深沢亮子賛助出演
【浜離宮朝日ホール 13:30】

21 日(日) 日本尺八連盟 埼玉支部 定期演奏会ー
高橋雅光作曲：尺八・箏・十七弦による大合奏曲「彩の国の旅路」(初演)
【久喜市民文化会館 14:00 開演 入場料 3,000 円】

21 日(日) 作曲：橘川琢／作曲：清道洋一
「ぷら임スペシャルプログラム『語りとテルミンで紡ぐ アグニの神』」
1. 抒情組曲「日本の小径(こみち)《古道探訪集》op. 55」より「2つの風舞・
～建長寺 760 年に寄せて」～テルミンとギターによる(初演)(作曲)橘川琢、
(テルミン)大西ようこ、(ギター)三谷郁夫
2. 「アグニの神(原作：芥川龍之介)」(初演)(作曲)清道洋一、(語り)
水沢有美、(演奏)ぷら임(大西ようこ・三谷郁夫)(美術)関根賢治
【鎌倉・建長寺方丈(龍王殿) 16:00 開演】
前売り 3,000 円／当日 3,500 円 + 建長寺拝観料 300 円が必要です。

8 月

22 日(木) 栗栖麻衣子(Pf.)他出演ーつぼみの会 子育て応援コンサート
*11:00～あいいうえおんがくかい *12:30～いろはにほっとコンサート
*15:30～かきくけコンサート(全3回公演) 【熊谷市文化創造館さくらめいと
月のホール各部とも一般・小学生以上 500 円未就学児無料 通し割引券あり
【問合せ:事務局 080-3310-4238 日本音楽舞踊会議後援事業】

9 月

16 日(月) 深沢亮子(Pf.)ーデビュー60 周年リサイタル 連弾と2台のピアノ作品によ
る
共演：野原みどり、小沢麻由子、五味田恵理子、栗栖麻衣子
予定 モーツァルト、ドビュッシー、フォーレの作品
【浜離宮朝日ホール 14:00 開演 問合せ:03-3561-5012 (新演奏家協会)】

17 日(火) 機関誌編集会議 19:00～ 日本音楽舞踊会議事務所

21 日(土) 浜尾夕美(Pf.)ーピアノリサイタル ノスタルジー～ロシアの巨匠たち
スクリャービン、メトネル、ラフマニノフ他の作品より 日本音楽舞踊会議後援
事業【浜離宮朝日ホール 18:00 開演 問合せ:03-3561-5012 新演奏会協会】

26 日(木) CMDJ 2013 年オペラコンサート
【すみだトリフォニー 小ホール(詳細未定)】

30 日(月) 深沢 亮子(Pf.) 翔の会 モーツァルト公開講座【10:00～会場未定】

10 月

28 日(月) 様々な音の風景Ⅹ ～20 世紀以降の音楽とその潮流～
【すみだトリフォニー 小ホール(詳細未定)】

11 月

8 日(金) 若い翼による CMDJ コンサート 6
【すみだトリフォニー小ホール (詳細未定)】出演者募集中

11 日(月) 深沢 亮子(Pf.) - 翔の会 公開レッスン 【10:00~ 会場未定】

25 日(月) 深沢亮子(Pf.) - 3 台のピアノのための協奏曲【文京シビックホール】

12 月

2 日(月) 並木桂子(Pf.) - 共演: 岸洋子(Pf.), 関森温子(Voc.), 島田真千子
(Vn.) 他 アレンスキーの魅力 (仮題) シリーズ 1
2 台のピアノの為に組曲第 1, 2 番、ピアノトリオ第 1 番、歌曲集より
【杉並公会堂(小) 3,500 円(小学生以下 1,000 円) 19:00 開演
問合せ: 並木 080-3003-2102】

6 日(金) 深沢亮子とその仲間による“ピアノと室内楽の夕べ” (仮称)
出演: 深沢亮子(Pf.) 恵藤久美子(Vn.) 安田謙一郎(Vc.)
助川敏弥: Gismonda (2010~2011)、ちいさきいのちのために (2004)
モーツァルト: ピアノトリオ G-Dur K. 564
ミヨー: ヴァイオリンとチェロのためのソナチネ Op. 324
モーツァルト: ピアノトリオ C-Dur K. 548 【音楽の友ホール】

8 日(日) 栗栖麻衣子(Pf.) 他出演
ーぴあの×ぴあの~ 2 台ピアノによるコンサートリスト: 交響詩 前奏曲、
ラフマニノフ: 組曲第 2 番、ブラームス: ハイドンの主題によるヴァリエーシ
ョン、2 台 8 手、2 台 1 2 手作品他
【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール 一般 2000 円/高校生以下
1500 円 問合せ: 事務局 080-3310-4238 日本音楽舞踊会議後援事業】

2014 年

1 月

19 日(日) 声楽部会公演「2014 年 新春に歌う」 (仮称)
【すみだトリフォニー小ホール (昼間公演)】

3 月

10 日(月) 邦楽部会コンサート (仮称)
【すみだトリフォニー小ホール (詳細企画)】

4 月

10 日(金) フレッシュコンサート 2014【すみだトリフォニー小ホール (詳細未定)】

2. 新入会員挨拶



穴原 雅己 (あなはら まさみ) 作曲 正会員

作曲を黒髪芳光、中島洋一の各氏に師事し、中島先生の勧めで 2003 年 1 月に賛助会員となって以来、会の様々な活動に参加させていただき、作品 (歌曲、ピアノ曲、弦楽四重奏曲) の発表も行うことができました。この度、賛助会員となって 10 年経過という節目を迎え、また今回も作曲部会公演 (6 月) に出品を予定させていただいている中で、正式な会員の立場で活動に参加いたしたく、正会員として入会させていただきました。今後とも、会の活動等を通

じて研鑽を積むとともに、作品の発表などを行っていければと考えております。よろしくをお願いいたします。

本山 淳一（もとやま じゅんいち）箏 青年会員



この度、新しく青年会員に加えていただくこととなった本山淳一と申します。専門は箏曲で、佐薙のり子先生のご紹介で、日本音楽舞踊会議に入会することになりました。

私は、大学の頃は、邦楽のサークルに所属して、生田流箏曲で、主に器楽ものの現代箏曲を周りの学生と合奏して楽しんでいました。途中からラジオやCDなどで古曲を聴くようになり、山田流の唄ものに魅かれて、山田流箏曲の先生に習い始めて、今年で10年になります。

ある日、「音楽の世界」を先生の家で読む機会があり、私が普段関わりのないような分野の方の報告や批評精神豊かな記事などに好奇心がくすぐられて、日本音楽舞踊会議に関心を持ち、参加を希望することになりました。これから、どうぞよろしくお願いいたします。

日向 豊都（ひなた とよさと）箏 準会員



この度準会員として入会させて頂きました、箏曲山田流の日向豊都と申します。

新たに邦楽部会を立ち上げるとの事でお声を掛けて頂き、また入会に際し推薦して下さいました、佐薙岡豊先生、助川敏弥先生に心より御礼申し上げます。

私は北海道札幌市出身で今も札幌中心に演奏活動をしております。演奏活動をする上で地方におりますと不便な事も多々ございますが、一度離れてみて札幌の良さも再確認致しました。これからは地元根付いた演奏家でありたいと思っている今日この頃です。そして入会後は様々なジャンルの会員の皆様と交流を持てる事を楽しみにしております。まだまだ勉強中の身ではございますが、これをきっかけに自分自身も益々精進し、邦楽が盛り上がるように頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

山木 七重（やまき ななえ）箏 準会員



この度、助川敏弥先生、佐薙のり子先生にご尽力いただきまして日本音楽舞踊会議のお仲間に入れていただく運びとなりました。このような歴史ある会に入会させていただき心より嬉しく思います。

今まで演奏会やリサイタルを通して浄瑠璃を中心とした箏や三絃の古典曲を主に勉強してきましたが、このような機会をいただけたことで、邦楽の世界にとどまらず、さまざまなジャンルの演奏家の方や舞踊家の方と交流し共演させていただくことを、今から楽しみにしております。色々な事に意欲的に取り組んで勉強して参りたいと思っておりますので、どうぞご指導の程宜しくお願いいたします。

編集後記

月日の経つのは速く、新年を迎えてから間もなく半年が経過します。今年に入ってから富士山が世界文化遺産として登録されることになったり、三浦雄一郎氏が80才で世界最高峰のエベレスト登頂を果たし、最高齢登頂記録を更新するなど、山に関するよいニュースが続きました。また4月には新しい歌舞伎座でこけら落とし公演が始まるなど、文化面でも明るいニュースがありますが、私も早速4月21日に歌舞伎へ芝居を観に行っていました。ところで、本会でも新たに邦楽部会が発足し、優秀な日本伝統音楽の演奏者が数人入会するなど、明るいニュースがあります。いまの時期は一年でも最も太陽の光が強く、晴れば目眩がするほどの眩しいお日様が世界を照らします。6月14日には作曲部会の作品展が開催されますが、夏至のお日様の光をいただき、力強く前に進もうではありませんか。

(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセント	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦

音楽の世界 6月号(通巻 549号)

2013年6月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax: (03)3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします